令和４・５年度
北区教育委員会研究協力校

研究主題

自ら問題を見付け、共に学び合って解決する児童の育成

～ＮＩＥの日常化と教材開発を通して～

令和６年２月９日（金）

東京都北区立滝野川小学校

◇◆◇　も　く　じ　◇◆◇

◇あいさつ …… 1
◇はじめに …… 2

Ⅰ　研究の概要
1　研究主題 …… 3
2　研究主題設定の理由 …… 3
3　目指す児童像と主な学習活動・内容 …… 4
4　研究全体構想図 …… 5
5　研究組織図 …… 6
6　研究経過 …… 7
Ⅱ　ＮＩＥの理論
1　本校の目指すＮＩＥ …… 10
Ⅲ　研究実践
1　低学年分科会
第１学年　算数科学習指導案「どちらがながい」 …… 14
第２年生　国語科学習指導案「かたかなの　ひろば」 …… 19
2　中学年分科会
第３年生　国語科学習指導案「生活の中で読もう『ポスターを読もう』」…… 24
第４年生　社会科学習指導案「自然災害からくらしを守る『水害からくらしを守る』」… 30
3　高学年分科会
第５年生　国語科・総合的な学習の時間の学習指導案「新聞記事を読み比べ、意見文を書こう」 …… 37
第６年生　算数科学習指導案「およその面積と体積」 …… 42
4　特支分科会
４組　国語科学習指導案「新聞を作ろう　～先生にインタビューしよう～」…… 48
Ⅳ　全体のまとめ
1　実態調査の分析 …… 52
2　学力調査の分析 …… 54
3　研究の成果と課題 …… 57

Ⅴ　資料 …… 59

◇おわりに …… 68

あ い さ つ

北区教育委員会教育長　清正　浩靖

北区立滝野川小学校は、令和４・５年度北区教育委員会研究協力校として、「自ら問題を見付け、共に学び合って解決する児童の育成～ＮＩＥの日常化と教材開発を通して～」を研究主題に掲げ、研究とその実践に取り組んでこられました。また、本校は、過去、平成２６・２７年度にも、同内容で研究協力校として研究実践し、その実践を基盤として、本日、ここに、研究の成果を発表されますことを、心からお慶び申し上げます。

現行の学習指導要領では、NIE に関することとして、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善において、各種の統計資料や新聞、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること」と示されております。児童が新聞に取り上げられたニュースから問い（「なぜ、どうして」、「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいか」）を発見し、その答えを対話しながら協働的に探究し、そのことを通して自分自身の意見や考えを構築していく学びの実現に、NIE は最適な学習方法の１つであると考えます。

本校の研究においては、「低学年」、「中学年」、「高学年」、「特別支援学級」のそれぞれに、NIE を通して問題解決型の学習における目指す児童像を設定し、「NIE たいむ」、「新聞活用学習」、「新聞制作学習」、「新聞機能学習」において、どのような学習をするのか、到達目標をどこに設定するのかといった、学年ごとに NIE の視点を取り入れたカリキュラム化を図ってきました。NIE を日常的に取り入れることにより、児童の意見や考えを深めたり、交流する際の根拠の共通化を図り、よりよい交流ができたりするなど、発展的な学習にもつなげており、児童の思考力・判断力・表現力が育ってきております。

また、朝学習の時間を「NIE たいむ」とし、NIE の日常化を図ることを通して社会への関心を広げ、広い視野から思考・判断し、主体的に行動する力を育成しております。

今後、この２年間にわたる本研究の成果を各学校において広く活用され、北区の教育がより一層充実することを願っております。

最後になりましたが、本校の研究を進めるにあたり懇切丁寧にご指導いただきました日本新聞協会 NIE コーディネーター 関口 修司先生をはじめ、関係団体・関係の諸先生方、保護者・地域の皆様に深く感謝申し上げます。また、これまで熱心に研究と実践に取り組んでこられました、市川 由紀絵校長先生をはじめとする教職員の皆様のご努力に対し、心より感謝を申し上げ、挨拶といたします。

は　じ　め　に

校長　市川　由紀絵

本年５月、新型コロナウイルスが２類から５類に引き下げられ、令和２年初頭から３年余り続いた感染症との戦いは、ひとまず収束をむかえました。感染症の拡大は、教育活動における様々な制限や児童の学習活動にも大きな影響を与えましたが、その一つとして、GIGA スクール構想の導入が前倒しされ、一人１台端末が急速に普及したことが挙げられます。児童の日常においても、インターネットやオンラインゲーム、SNS がより身近なものになり、一日の使用時間も多くなっているのが現状です。

社会の在り方が急速に変わる Society5.0 時代、情報化が急速に進み社会の変化が激しく予測困難な時代にあって、あふれる情報を取捨選択し、偏ったものではなく、真偽を見極めながら、広く確かな情報を取り入れることは、これからの時代を生きる子供たちにとって重要な力だといえるでしょう。滝野川小学校がこの１０年来、たゆまず学校全体で NIE（Newspaper in Education）を続けてきたことは、変化の激しい時代を生きぬく子供たちにとって重要な武器になると確信します。

本校では、「自ら問題を見付け、共に学び合って解決する児童の育成～NIE の日常化と教材開発を通して～」を研究主題に、長年にわたり、児童一人一人に問題解決能力を培うために、NIE を日常的に実践し、授業改善に努めてまいりました。児童が日常的に新聞に触れ新聞に学ぶ環境をつくる「NIE の日常化」、NIE の新たな可能性を探る「教材開発」に継続して取り組むと共に、本年は、令和４・５年度北区教育委員会研究協力校の２年次として、特に、現行の学習指導要領の柱である「主体的・対話的で深い学び」実現に向け、

①児童の主体的な問題解決にするための学習過程の工夫

②児童が共に学び合って解決する場面の設定

③NIE の効果的な活用

の３点を授業改善の柱として実践を積み重ねてまいりました。また、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けて、きたコン（一人１台端末）を効果的に活用しつつ、児童の学びの充実を図ってまいりました。

毎朝、新聞委員会の児童が、玄関先から校長室前に新聞を運び、並べてくれます。北区新聞販売同業組合のご協力により無償で配達される大手新聞社６紙と、校内予算で購入した小学生新聞２紙の中から、日直が選んで学級に持ち帰り、朝の会で紹介されたり、給食時の放送で放送委員会が紹介したりしています。

毎週金曜日の朝の１５分間の「NIE たいむ」は、１０年間ずっと続いています。１年生から６年生まで、週に少なくとも１回は新聞にふれることで、興味のある記事を選び、大体の要旨をつかみ、感想や意見を書くことで、総合的な読解力や思考力、表現力が身に付いていることを実感します。各種学力調査の結果からも、本校の子供たちは、文章に対する抵抗感が少なく、何かしら自分の意見を書くことが日常化していることで、「無答率」が少ないです。また、記述式の問題の正答率が平均と比べて高くなっています。

また、教員自身も新聞にふれる時間を作ろうと、研究授業のあとの休憩時を「大人の NIE たいむ」として、互いに見付けた記事の情報交換をしています。私自身も毎朝新聞を開き、子供たちや教員に紹介する記事を見付けることが日課となり、「校長先生からのメッセージ」として、伝えてきました。いずれも、「無理せず　でも確実に」続けることで、成果につながることを実感しています。

北区においても、北区教育ビジョンの中に「新聞大好きプロジェクト」として NIE に力を入れてきましたが、本校の研究がその効果を検証する機会となれば幸いです。

結びに、長年にわたり、本校の研究に懇切丁寧にご指導いただきました、日本新聞協会 NIE コーディネーターであり、本校第１８代校長である関口修司先生、研究発表会にご後援いただきました公益社団法人　文字・活字文化推進機構、公益社団法人　理想教育財団、一般社団法人　日本新聞協会の関係団体の皆様に心より感謝申し上げます。また、この度の研究の機会をいただくと共に、多大なるご指導ご支援をいただきました北区教育委員会の皆様に厚く御礼申し上げます。

Ⅰ　研究の概要

１　研究主題

自ら問題を見付け、共に学び合って解決する児童の育成
～NIEの日常化と教材開発を通して～

２　研究主題設定の理由

本校では、平成２５年度より、NIE（Newspaper in Education）を校内研究に位置付け、「自ら問題を見付け、かかわり合いながら主体的に学ぶ児童の育成」を目指して授業改善に取り組んできた。令和２年度から新学習指導要領が全面実施されているが、改訂の柱である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、NIE を教育活動に取り入れることは有効であると考え、引き続き実践を積み重ねてきた。

この間、社会は大きく変化し、社会の在り方が劇的に変わる「Society５．０」が到来し、また、新型コロナウィルス感染症の感染が世界的に拡大するなど、先行き不透明な「予測困難な時代」であるといえる。このような時代を生き抜き、生涯にわたり主体的に学び続ける児童を育成するには、知識・技能の習得に加え、他者と協働しながら課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等及び主体的に学習に取り組む態度を育むことが必要である。社会が直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、どのような未来、社会や人生を創っていくのかを児童が自ら考えられるようにしたいと考える。

社会が大きく変化する中で、児童が興味・関心をもち、見通しをもって粘り強く学習に取り組んだり、振り返って次につなげる学びをしたりするには、どのような学習材を活用すると有効か。児童相互、児童と教職員や地域の人との対話をしたり、先哲の考え方を手掛かりに考えたりすることで、自己の考えを深めるにはどのような学習形態であるとよいか。さらに習得した知識を相互に関連付け、情報を精査して考えを形成し、問題を見いだして解決しようとする、また、思いや考えを基に新たに創造することに向かう姿勢を身に付けさせるにはどのような取組が考えられるか。情報があふれている中で、多くの情報媒体の中から、正確な情報を選択し、自分の考えをもつ「情報活用能力」の育成は、非常に重要である。メディアリテラシー、すなわち情報を読み解き活用してコミュニケーションに活かす能力の育成は、最重要課題と捉えている。

本校では、教育における「デジタル化」が進む中で、ICT機器の有効な活用を探ると同時に、新聞は、最近の出来事や社会の動き、最新の科学技術など、教科書以外の知識を得ることもでき、児童の意見や考えを深めたり、交流する際の根拠の共通化を図りよりよい交流ができたりする発展的な学習にもつなげられる貴重な教材の一つとして、様々な活動を継続してきた。北区新聞販売同業組合のご協力により、毎朝６紙５０部ほどが学校に届くほか、小学生新聞を全学級分学校予算で購入している。この新聞を活用して、次のような取り組みを行っている。

① 全学年が年間を通して週１回行う「NIEたいむ」における新聞スクラップ活動
② 日直が新聞記事を紹介する活動
③ 新聞委員会による学校新聞の制作
④ 放送委員会による新聞記事の紹介コーナー
⑤ 各教科における教材化

NIE を日常的に取り入れることにより、児童にとって新聞はより身近な物となり、社会に目を向けるツールの一つとなっている。さらに新聞を読む習慣が身に付き、読解力や表現力が定着してきていることは、各種調査によっても結果として表れている。

NIE の教材開発については、（１）新聞で学ぶ（新聞活用学習）（２）新聞に学ぶ（新聞制作学習）（３）新聞を学ぶ（新聞機能学習）の３分野から、学習資料としての新聞記事の活用方法の工夫や、新聞づくりの方法や内容の工夫など、以前からの研究を引き継ぎ進めるとともに、学年ごとに NIE のカリキュラム化を図る。

今年度は、これまでの成果と課題を受け、NIEについての実践を継続し、「自ら問題を見付け、共に学び合って解決する児童の育成」を目指すために、NIEの手法が有効な手だての一つになることを検証し、それらの成果を教材化していきたい。

以上のようなNIE の有効性を探り、検証するために上記の研究主題を設定した。

３　目指す児童像と主な学習活動・内容

ＮＩＥを通した問題解決型の学習における目指す児童像を以下のようにまとめた。

		低学年	中学年	高学年	特別支援学級
問題解決型の学習		・問題を見付けようとする児童 ・自分の考えをもてる児童 ・互いの思いを受け止められる児童	・問題を見付け、解決しようとする児童 ・自分の考えを伝えられる児童 ・互いの考えを認め合い学び合える児童	・問題を見付け、すすんで解決しようとする児童 ・自分の考えを分かりやすく表現できる児童 ・友達と関わりながら考えを深められる児童	・見通しをもって取り組もうとする児童 ・自分の思いをもてる児童 ・友達の話を聞いて考えられる児童
ＮＩＥ（NIEたいむ）		・新聞とつながり、新聞を楽しむ児童	・新聞を通して、友達とつながる児童	・新聞を通して、自分と向き合い、社会とつながる児童	・新聞とつながり、新聞で遊んだり学んだりする児童
		・新聞を開く。 ・新聞で遊ぶ。 ・好きな写真や記事を見付ける。	・新聞記事（子ども新聞または一般紙）をスクラップする。（段階を追って要約・感想）	・新聞記事（子ども新聞または一般紙）をスクラップする。（要約・感想・意見→投書） ・デジタル記事を活用する	・新聞記事をスクラップする。（写真から見付けられるもの、要約、選んだ理由など）
主な学習活動（○）・到達目標（■）	新聞活用学習	○新聞で遊ぶ ○新聞を読む ○写真の感想を書く	○見出しと写真を読む ○記事の感想を書く ○記事の感想を発表する ○写真を比べる ○記事の要約を書く	○記事を読む ○記事の意見を書く ○記事を比べる ○投稿(発信)する ○デジタル記事の検索機能を使う	○新聞で遊ぶ ○新聞に親しむ ○新聞を読む ○写真の感想を書く
	新聞制作学習	○壁新聞 (台紙に個々の記事の見出しを貼りつける) ■取材 （友達・先生・家族・地域の方など） ■簡単な割付	○壁新聞 ○学習新聞 （見学・読書・観察） ○学級新聞 ■取材 （友達・地域） ■見出しの工夫 ■５Ｗ１Ｈ ■決められた割付 ■資料(写真・グラフ)の工夫	○はがき新聞 ○壁新聞 ○学習新聞 （見学・実験・歴史・国際） ○学級新聞 ○学校新聞 ■取材 （地域・専門家・インターネット） ■事実と意見を分ける ■工夫した割付	○壁新聞 ○学習新聞 （見学・宿泊学習） ○学級新聞 ■取材 （友達・先生・家族・地域の方など） ■決められた割付
	新聞機能学習	○悪口を書かない ○新聞を遊ぶ （写真・記事・広告 ・４コマまんが ・テレビ欄等） ○興味ある写真を探す ○新聞折り紙 ○新聞ファッションショー	○個人情報は書かない ○新聞を楽しむ （一面・トップ記事 ・社会面・スポーツ面 ・見出し等） ○興味のある記事を探す ○スクラップの方法をを学ぶ ○「子供新聞」から一般紙へ移行して学ぶ。	○著作権に配慮する ○新聞を学ぶ （コラム・環境 ・政治経済等） ○テーマを決めて記事を探す ○スクラップの方法を工夫する ○記者から記事の書き方や生き方を学ぶ ○新聞社見学	○悪口を書かない ○新聞を遊ぶ （写真・記事・広告 ・４コマまんが ・テレビ欄等） ○興味ある写真を探す ○スクラップの方法を知る ○新聞折り紙 ○新聞プール

4　研究全体構想図

児童の実態

- 学習に対する意欲は高く、課題をやり遂げようという意識は強い。
- 生活や学習で見付けた新しい問題に対して既習事項や生活体験から、自分なりの考えをもって、問題を解決しようとする姿が見られるようになってきているが、まだ十分とは言えない。
- 友達の考えを聞いて自分の考えを深めたり、考えを友達に正確に伝えたりする力は、まだ十分とは言えない。

本校の教育目標

元気で
- 心身ともに健康で情操豊かな子ども

仲良く
- きまりを守り互いに助け合う子ども

根気よく
- よく考え最後までやりぬく子ども

よく考え、チャレンジして学ぶ学校

社会の要請

これからの社会では、児童が基礎的な知識・技能を確実に習得し、それらを活用して、自ら考え判断し表現すること、また、現代社会の様々な問題に積極的に取り組み解決する力を育むことが求められている。

そのためには、事実を正確に認識し、自分の知識や経験と結び付けて、多様　な観点から総合的に考えをまとめることが必要である。また、学習活動や、集団の中でお互いの考えを伝え合い、違いを認め合うことを通して、自らの考えや集団の考えを発展させていく力の育成が必要である。

研　究　主　題

自ら問題を見付け、共に学び合って解決する児童の育成

目指す児童像

低学年
- 問題を見付けようとする児童
- 自分の考えをもてる児童
- 互いの思いを受け止められる児童
- **新聞とつながり、新聞を楽しむ児童**

中学年
- 問題を見付け、解決しようとする児童
- 自分の考えを伝えられる児童
- 互いの考えを認め合い学び合える児童
- **新聞を通して、友達とつながる児童**

高学年
- 問題を見付け、進んで解決しようとする児童
- 自分の考えを分かりやすく表現できる児童
- 友達と関わりながら考えを深められる児童
- **新聞を通して、自分と向き合い、社会とつながる児童**

特別支援学級
- 見通しをもって取り組もうとする児童
- 自分の思いをもてる児童
- 友達の話を聞いて、考えられる児童
- **新聞とつながり、新聞で遊んだり学んだりする児童**

研　究　副　主　題

ＮＩＥの日常化と教材開発を通して

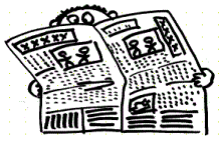
研　究　の　仮　説

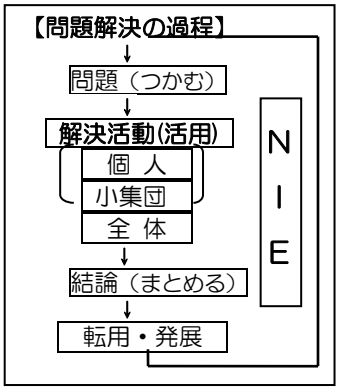
児童の思いや考えを交流し、問題解決の過程を効果的に進めながら、ＮＩＥの日常化と教材開発を行えば、思考力・判断力・表現力が身に付き、関わり合って主体的に学ぶことができる児童が育つであろう。

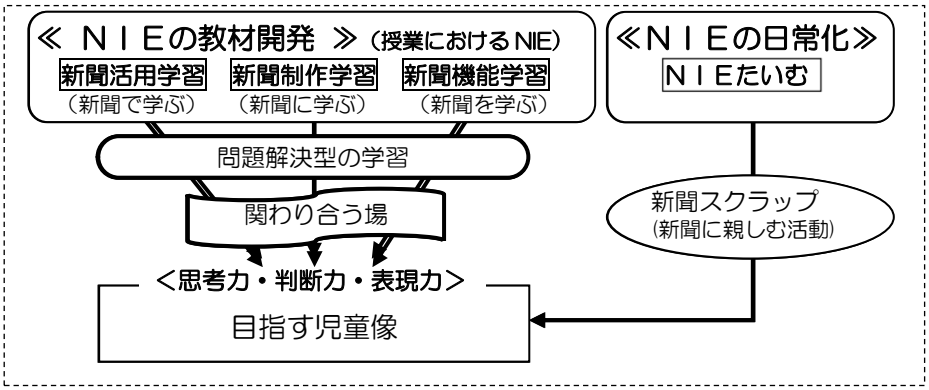
指　導　の　手　だ　て

① 問題解決型の学習の全教科・領域での実践
② 自ら問題に関わり、互いに学び合える場の設定と工夫
③ 新聞にふれる時間の確保（「NIEたいむ」など）
④ NIEを視点に入れたカリキュラム作り

＊「NIE たいむ」とは朝学習等の時間を活用した新聞に親しむ活動の時間の名称。







研究運営部　（校長・副校長・主幹教諭・研究主任）

○研究に関わる内容・計画の立案
○研究紀要検討
○研究発表及び公開授業の立案

研究推進委員会　（研究主任・各学年・専科等から各１名ずつ）

○研究分科会の推進
○研究内容の検討・分析
○研究授業の検討・分析
○協議会の運営・記録
○研究紀要の計画・検討

低学年分科会	中学年分科会	高学年分科会	特支分科会
１年　２年 音楽　図工	３年　４年	５年　６年 算数	特別支援 （知的障害） 学級

※滝野川学級（巡回指導教員）は、各分科会に分かれている

研究推進委員が各部を運営する

研究部	調査・紀要部	環境部
年間計画・研修計画 指導案提案・検討	実態調査・分析 研究紀要 記録・写真	掲示計画・作成 （廊下・教室資料・黒板） ホームページ

各分科会の中で研究部、調査・紀要部、環境部のいずれかに所属する。

６　研究経過

令和４年度

月	日	曜		内　容
4	7	木	全体会	今年度の研究の確認・研究授業日程調整
6	22	水	全体会	問題解決型学習に関する研修
7	13	水	研究授業①	第６学年　国語科　「Let’ｓ　ビブリオ&シンブリオバトル！！！」 （新聞活用学習） 指導者　浦野　熙　教諭 講　師　日本新聞協会ＮＩＥｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　関口　修司　先生
8			夏季休業中	各教科・領域の年間指導計画のＮＩＥを視点とした見直し 新聞記事収集・データベースの充実
10	12	水	研究授業②	第２学年　算数科　「長さをはかってあらわそう」（新聞活用学習） 指導者　砂川　恵子　主任教諭 講　師　日本新聞協会ＮＩＥｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　関口　修司　先生
10	27	木	授業実践①	第５学年　国語科　「資料を用いた文章の効果を考え、それを生かして書こう」 （新聞活用学習） 指導者　佐藤　歩　教諭
10	31	月	授業実践②	特別支援学級４組　生活単元学習　「那須宿泊学習を成功させよう！」 （新聞制作学習） 指導者　T1：高山　信義　主任教諭　T2：小林　亮子　主任教諭 T3：熊谷　健太　主任教諭　T4：長友　裕太　教諭
11	2	水	研究授業③ （区教委訪問）	第３学年　総合的な学習の時間「こんなこと調べてみたよ」 （新聞活用学習） 指導者　日高　泰人　教諭 講　師　北区教育振興部教育指導課　本間　正江　教育委員 北区教育振興部教育指導課　清水　みさ　統括指導主事 北区教育振興部教育指導課　菊池　努　指導主事 北区教育振興部教育指導課　小林　大輔　指導主事
12	13	火	授業実践③	第４学年　社会科　「とどけよう　命の水～玉川兄弟と玉川上水の開発～」 （新聞活用学習） 授業者　清水　希　教諭
12	13	火	授業実践④	第１学年　算数科　「どちらが　ひろい」　（新聞活用学習） 授業者　宮下　宏美　主任教諭
1	27	金	分科会	各分科会のまとめ・紀要原稿作成
2	20	月	分科会	今年度の研究のまとめ・来年度の研究について

令和５年度

月	日	曜		内　容
4	7	金	全体会	前年度までの研究について 今年度の研究の確認・研究授業日程調整
4	26	水	全体会	校内研修会 講　師　日本新聞協会ＮＩＥｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　関口　修司　先生
５月中				児童実態調査①（アンケート）
6	21	水	研究授業①	特別支援学級４組　生活単元学習「先生にインタビューしよう！」 （新聞制作学習） 講　師　日本新聞協会ＮＩＥｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　関口　修司　先生 東京未来大学教授　所澤　潤　先生 千田　聡　指導主事
7	12	水	研究授業②	第５学年　国語科・総合的な学習の時間　「新聞記事を読み比べ、意見文を書こう」 （新聞活用学習・新聞制作学習） 講　師　北区教育振興部教育指導課　千田　聡　指導主事
7	19	水	研究授業③	第２学年　国語科　「かたかなの　ひろば」　（新聞活用学習） 講　師　日本新聞協会ＮＩＥｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　関口　修司　先生
夏季休業中			分科会	各教科・領域の年間指導計画の NIE を視点とした見直し 新聞記事収集・データベースの充実　公開授業用指導案作成検討
9	6	水	研究授業④	第３学年　国語科　生活の中で読もう「ポスターを読もう」 （新聞活用学習・新聞機能学習） 講　師　日本新聞協会ＮＩＥｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　関口　修司　先生
9	20	水	研究授業⑤	第１学年　算数科　「どちらが　ながい」　（新聞活用学習） 講　師　日本新聞協会ＮＩＥｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　関口　修司　先生 北区教育振興部教育指導課　千田　聡　指導主事
10	11	水	研究授業⑥	第４学年　社会科　「水害からくらしを守る」　（新聞活用学習） 講　師　日本新聞協会ＮＩＥｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　関口　修司　先生 北区教育振興部教育指導課　千田　聡　指導主事
10	27	金	研究授業⑦	第６学年　算数科　「およその面積と体積」　（新聞活用学習） 講　師　日本新聞協会ＮＩＥｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　関口　修司　先生
１１月中				児童実態調査②（アンケート）
2	9	金	研究発表会	公開授業・研究発表・講演・シンポジウム等
			研究のまとめ	校内研究の成果と課題、次年度の研究の方向性

※学習指導案や「全体のまとめ」の中で、「きたコン」という言葉が使用される。これは、北区から児童個人に貸与されているタブレット端末の通称である。

Ⅱ　ＮＩＥの理論

１　本校の目指すＮＩＥ

(1)ＮＩＥ（Newspaper in Education）の意味

ＮＩＥは、日本語では「教育に新聞を」と訳され、新聞を教材や学習材として学校教育に役立てる教育方法のことである。もともとはアメリカの新聞界が若者の活字離れに危機感を抱き、1930 年代から始まった取り組みである。日本では、1985 年の新聞大会（静岡大会）で提唱されたのが始まりであり、教育界と新聞界の協力による教育運動と言える。

本校は、その教育運動の成果を踏まえつつ、学校教育の立場からＮＩＥの必要性を明らかにしてきた。若者の活字離れや、社会の動きへの無関心、規範意識の欠如などの現代社会の課題解決の一手段として、本校の研究を通して、新聞を効果的・効率的に活用する手段を探る。また、ＮＩＥを、情報教育の基礎として位置付けて、情報活用能力の育成の手段としても探ってきた。

したがって、本校のＮＩＥは、授業において児童自らが問題を見付け、解決する力を育成するための問題解決型学習と関連付けることに留意して勧めていく。また、授業だけでなく日常的に触れる機会を増やし、新聞と学びを結び付けていけるよう、研究を進める。

(2)ＮＩＥで育てたい態度や能力

新聞の多岐にわたる内容の特性から、ＮＩＥで育てたい態度や能力も多種多様に考えることができる。それらを集約し分類する方法も様々に考えられるが、本校では、以下の８点とした。

①　社会性　…社会に関心をもち、社会の動きや社会で問題になっていることを、自分の問題として考えることができる。社会参画意識をもつことができる。

②　人間性　…多様な意見や価値観を認め、受け入れることができる。

③　主体性　…多くの事実や意見の中から、自らの判断で自分の意見・判断を練り上げ、調べ解決していくことができる。

④　総合的な読解力　…社会的・科学的・数学的な文章を、読み取るグラフや図表、写真などの資料と総合して読み取ることができる。（PISA型読解力）

⑤　文章表現力　…自ら足を運び、見たり聞いたりして取材したことを、文章に表すことができる。また、社会の出来事について、根拠を明らかにして自分なりの考えを文章に表すことができる。

⑥　情報活用能力　…多くの事実や意見の中から、自分に必要なものを正しく選んだり、読み取ったり、利用したりすることができる。また、相手を考えて、自分の意見を正しく発信できる。

⑦　コミュニケーション力
…自らの考えを、根拠を明確にして伝えるとともに、相手の考えとの違いを認め、よさを取り入れながら、自らの考えをより深めることができる。

⑧　批判的思考力　…先入観にとらわれず、正しいことかどうかを吟味して考え判断する。
※全てを批判する姿勢とは異なる。（クリティカル・シンキング）

⑨　活字に親しむ態度…新聞に親しみ、読書を好む態度を育て習慣化する。新聞や書籍を単に読むだけでなく「批判的に読める」読者としての姿勢をもつことができる。

(3)ＮＩＥの３分野

本校では、ＮＩＥとしての概念を、従来からあった「新聞教育」という概念と同様に広く捉え、次の３分野が位置付くものとして、研究を進めてきた。

① 新聞活用学習

新聞活用学習は、「新聞で学ぶ」学習であり、新聞を各教科・領域等の学習で資料として活用することを通して、各教科・領域等のねらいを効果的・効率的に達成させる学習活動である。教師が学習のねらいに合った新聞記事を活用させるだけでなく、児童自らが新聞情報の収集や分類選択、整理、活用、保存などの新聞スクラップの作業を通して、集めた資料を、能動的に学習に活用する学習活動である。

効果的・効率的な活用が期待できる主な教科・領域等は、社会科や国語科、総合的な学習の時間であるが、新聞記事の内容や教師の工夫によって、その他の教科・領域等でも効果的・効率的な活用は可能である。この活用によって、教科書等の資料を、より新しい情報として提供できるとともに、より身近な出来事として捉えさせることができる。

新聞記事の活用の仕方には、児童の発達段階に合わせ、新聞の写真、絵、図、グラフ、文章などを個々に活用する他、それらを組み合わせて活用する方法がある。最終的（第６学年後半）には、新聞のどの部分もそのまま活用できることを目指す。

本校では、以上のような活用の他に、児童が各自行っている新聞スクラップを活用した、新聞社への投書や、朝の会や給食中の放送委員会によるニュースの紹介などを実践している。

② 新聞制作学習（新聞づくり）

新聞制作学習は、実際の「新聞に学ぶ」学習であり、児童が新聞制作（新聞づくり）を通して、ＮＩＥ活動のねらいを達成する学習活動である。児童が、情報の収集（取材）や整理、加工、編集、発信（発行）などの新聞制作の一連の作業を通して、新聞制作の方法を身に付けるとともに情報モラルの基礎を培うものでもある。また、児童が共同で制作する学級新聞などでは割付や編集などの過程を通して、コミュニケーション力や互いのよさを認め合う心情を育み、学級経営を支える児童の人間関係を築くことができる。

児童の制作する新聞には、学習新聞や見学新聞などの個人で制作するものと、前述した複数の児童が協力して制作する学級新聞やグループ新聞などがある。

本校では、以上の新聞制作の他に、自分を紹介する「自己紹介新聞」や、新聞委員会が毎月発行する「学校新聞」などを制作している。

また、短時間で制作できる「はがき新聞」を学習のまとめの活動として位置付けることが増えている。

③ 新聞機能学習

新聞機能学習は、「新聞を学ぶ」学習であり、実際の新聞社や新聞紙面、新聞発行までの過程などの新聞それ自体を調べることを通して、情報媒体の一つとしての「新聞」の機能を学ぶ学習活動である。この学習は、５学年社会科の情報単元の第一小単元に当たるものであり、具体的　には、新聞の読み比べ、新聞紙面や新聞記事の分析などの学習活動となる。また、実際の新聞の取材や編集などの仕事の様子を調べることを通して、人権や個人情報、知的財産権、情報の信憑性への配慮など情報を発信する側のモラルにも気付かせることをねらう。さらに、数社の新聞を読み比べることを通して、同じ出来事（事実）でも伝え方（表現）が異なるため、情報を受信する側は、様々な解釈が可能となることなど、受信する側のモラルにも気付かせることをねらう。

本校では、以上のような学習の他に、新聞スクラップの際に行っている新聞記事（写真）についての要約や感想・意見などを記述する学習活動を実践している。

(4)分野にまたがる学習

ＮＩＥの３分野は、全ての学習活動がそれぞれの分野の中に明確に位置付くわけではない。複数の分野にまたがる学習活動もある。ここでは、その主な三つの学習活動について述べる。

①新聞スクラップ

新聞スクラップは、スクラップした記事を、各教科・領域等の学習に活用する場合は新聞活用学習に、スクラップした記事の内容そのものを分析したり要約して感想や意見を書いたりする場合は新聞機能学習に分類している。両方に属する場合もある。

本校では、毎週金曜日の朝学習の時間を「ＮＩＥたいむ」として、全校で新聞スクラップに取り組んでいる。また、夏季休業中の第３・４・５・６学年の課題として、北区教育委員会主催の「比べて読もう新聞コンクール」に出品している。

②スクラップ新聞

スクラップ新聞は、スクラップした新聞記事を一つのテーマで集めて模造紙に貼り、コメントを書き加えることで１枚の新聞のように構成する活動である。このことから、スクラップ新聞の活動は、新聞を制作する視点からは新聞制作学習として捉えることができる。また、記事を一つのテーマの課題解決の資料として活用する視点からは、総合的な学習の時間における新聞活用学習と捉えることができる。

③情報モラルの学習

情報モラルの学習は、新聞制作学習の際は情報の発信側のモラルを、新聞機能学習の際には情報の発信側・受信側のモラルをそれぞれ学習することができる。

本校では、情報モラルを道徳的側面とセキュリティーの面からＩＣＴ活用と連動させ、ＮＩＥのねらいとして位置付けている。

(5)教材としての新聞

ＮＩＥにとって新聞は、最も重要な教材である。しかし、新聞は本来教材として作成されたものではなく、どんな新聞（記事）でも教材となる訳ではない。そこで、新聞を教材する際の優れている点と問題点を踏まえ、新聞を教材とする視点を挙げる。

①新聞が教材として優れている点

ａ．最新のデータや情報が得られる。
ｂ．実際にあることやあったことを題材にできる。
ｃ．社会的に問題になっていることを取り上げられる。
ｄ．１紙の中に多種多様な情報があり、多様な学習内容と関連付けられる。
ｅ．人々の生の声、異なった意見、多様な考え方を知ることができる。
ｆ．時間経過をたどって調べることができる。
ｇ．誰でも容易に手に入れることができる。
ｈ．複数の新聞を比べて検討できる。
ｉ．写真、グラフや絵などを多面的に活用できる。
ｊ．切り抜いて、保存できる。
ｋ．教師自身の教材観を深め、教養を高めることができ指導力の向上が期待できる。
ｌ．記録性に優れ、記事データベースや縮刷版を活用することができる。
ｍ．記録性に

②新聞の教材としての問題点

ａ．児童には、文字が小さい。
ｂ．まだ学習していない漢字が使われているため、読めない文字がある。
ｃ．児童には、文章が難しい。
ｄ．教科書とは異なる表記法で書かれているところがある。
ｅ．児童の学習に適するよう解説が必要となる記事がある。
ｆ．特に雑誌の広告等で、児童には見せたくない見出しが過激なものや、言葉遊びの度が過ぎるものがある。
ｇ．社会の暗い面や否定的な面が取り上げられることが多い。
ｈ．事件の結果や現象面がクローズアップされ、教育的観点や人権・プライバシーへの配慮に乏しい記事がある。
ｉ．新聞社や記者の考えが入り、教材の公正中立性という点で疑問となる記事がある。
ｊ．一般紙を購読していない家庭がある。
ｋ．いつ、どんな記事が出るか予想ができないため、年間等の指導計画の中に位置付けるのが難しい。
ｌ．教師に、教材化する力量と時間を必要とする。

③新聞の教材化の視点

ａ．教材化の条件
(a)指導のねらいに合ったもの
(b)客観性のあるもの
(c)児童の興味・関心をひくもの
(d)児童にも理解できるもの
(e)発展性があるもの（触発されて、児童自身の考えが引き出されたり深まったりするもの）

ｂ．教材化の留意点
(a)児童の実態に応じて、拡大コピーをする。
(b)児童の実態に応じて、ふりがなをつける。傍線を引く。難語句の意味を添える。
(c)児童の実態に応じて、教師が説明しながら読む。
(d)児童の実態に応じて、児童に分かるように書き換える。
(e)政党や宗教団体の機関誌、企業や団体の宣伝紙は避ける。
(f)新聞社によって表現や主張が異なる記事は、できるだけ複数紙を、読み比べる。
(g)できるだけ、新聞をまるごと活用させる。
(h)記事探し、教材作りなど、学校・学年で組織的に取り組む。を組む。
(i)教師も新聞スクラップ帳を作り、教材として使えそうな記事をストックしておく。
(j)場合によっては、新聞各社のデータベースや縮刷版を活用する。

ｃ．教材としての位置付け（※(a)(b)を中心とした教育課程への位置付けが必要）
(a)日常的・継続的に使う。
（朝の会や給食時の放送での記事の紹介、毎週金曜日の「ＮＩＥたいむ」）
(b)各教科・領域等の指導計画に組み入れる。
(c)日々の教育活動の中に臨機応変に取り入れる。

【新聞活用学習】　　第１学年　　算数科学習指導案

１年１組３４名

１　単元名

どちらが　ながい

２　単元の目標

□長さの比較などの活動を通して、長さや測定についての基礎的な意味を理解し、身の回りにある物の長さについて任意単位などにより比較する力を養うとともに、長さについての感覚を豊かにし、日常生活に活用しようとする態度を養う。

３　単元について

本単元では、身の回りにある物の長さに着目し、直接比較や間接比較、任意単位による長さの比べ方を考える力を育てるとともに、長さについての感覚を豊かにし、日常生活に活用しようとする態度も養う。

本単元での長さの学習は、「測定」の初めての学習であるため、測定活動の基礎となる具体的な操作や活動を重視する。体験を通して、児童がこれまで経験的に得てきた長さの概念を整理し、体系付けていく。量の測定の考え方は、①直接比較②間接比較③任意単位④普遍単位による測定の４つの段階で形成されている。本単元では、①②③の測定活動を扱い、比較の仕方を工夫する学習を通して、身の回りの物の長さの比べ方を考え、表現する力を身に付けていく。

４　研究主題とのかかわり

（１）問題解決型の学習に迫るために

○様々な比べる方法を引き出すために、一人１枚新聞紙を用いて操作しながら長さを比べる活動を設定する。

（２）児童が学び合って解決するために

○自分の意見がもてるように、ペアの友達と話し合いの活動を取り入れる。

○言語化できるように、友達に説明する時間を設ける。

○新たな方法を見付け出すために、二人で話し合う活動を設定する。

（３）NIE との関連

○身近な新聞を使うことで、児童の長さを比べることへの関心意欲を高める。

○新聞紙は、同じ大きさの物を用意しやすく、折り曲げるなどの活動が容易である。

５　単元の指導計画（６時間扱い）

問題把握：問、解決：解、学び合い：合、まとめ：ま

時	本時の目標（○） 主な学習活動（・）	◇評価規準（評価方法） □使う資料（NIE）
1	○身の回りにある物の長さを、直接比較の方法で比べることができる。 問　解　合 ・身の回りのある物の長さに着目し、直接比較や間接比較による長さの比べ方を考える。	◇長さについて物の特徴に合わせた比較の方法を考え、説明している。（観察） ◇長さを直接比較で比べることができる。（観察・ノート）
2（本時）	○身の回りにある物の長さを、直接比較や間接比較の方法で比べることができる。 問　解　合　ま ・身の回りにある物の長さに着目し、直接比較や間接比較の方法で長さを比べる。	□新聞紙 ◇長さについて物の特徴に合わせた比較の方法を考え、説明している。（観察） ◇長さを直接比較で比べることができる。（観察・ノート）
3	○直接比較ができない長さは、媒介物を用いた間接比較の方法で比べることができる。 問　解　合　ま ・間接比較の方法で長さを比べる。	◇直接比較ができない長さは、媒介物を用い間接比較によって比べられることを理解し、比べることができる。（観察・ノート）
4	○前時までの学習を踏まえ、身の回りにある物の長さを間接比較の方法で比べることができる。 解　合 ・間接比較の方法で長さを比べる。	◇間接比較によって長さを比べることができる。（観察・ノート）

5	○身の回りにある物の長さは、任意単位のいくつ分として捉えることで、数として表したり、比較したりできることを理解する。 問 解 合 ま ・身の回りのある物の長さに着目し、任意単位による長さの比べ方を考え、任意単位により長さを数値化して表す。	◇身の回りにある物の長さを数値化して表せることを考え、言葉や物を用いて説明している。（観察）
6	○任意単位による長さの比較についての理解を深める。 問 解 合 ま ・任意単位により長さを数値化して表す。	◇任意単位で長さを数値化して表したり、長さを比べたりすることが確実にできる。（観察・ノート） ◇任意単位で長さを数値化して表すことのよさに気付き、生活に生かそうとしている。（観察・ノート）

６　本時の目標（２／６時）

（１）本時の目標

□身の回りにある物の長さを、直接比較の方法で比べることができる。

（２）展開

	○主な学習活動 ・予想される児童の反応	◇指導上の留意点 □主な資料（NIE）　☆評価（評価方法）
問題把握	○前時の復習をする。 ・端をそろえる。 ・まっすぐに伸ばす。 ○本時の問題をとらえる。 たてと　よこの　ながさを　くらべよう。	□毎日小学生新聞 ◇直接比較をする時のポイントを確認する。
見通し	○新聞紙一枚の縦の長さと横の長さのどちらが長いかを予想する。 ・縦 ・横	◇新聞紙の縦と横が区別できるように色分けをする。
解決・学び合い	○新聞紙の縦の長さと横の長さを比べる方法を考える。 ・重ねて比べる。 ・折って比べる。 ・写し取って比べる。 ・切って比べる。 ○ペアで新聞紙の縦と横の長さを比べる活動に取り組む。 ・新聞紙を折って、横を縦に重ねる。 ○取り組んだ比べ方を発表する。 ○並べることのできない物の２つの長さを比べる方法を理解する。 ○新聞記事の縦の長さと横の長さの比べ方を考える。	◇一枚でできる比較方法を考えるよう促す。 ◇いろいろな物や道具（定規やはさみなど）を使わないで、折って重ねる方法を伝える。 ◇新聞紙を折って縦と横に重ね、直接比較で長さを比べる方法をまとめる。 ◇新聞紙の縦の長さと横の長さを比べる方法を全体で確認し、言葉で説明できるように整理する。 ◇折って比べることができないことに気付いたことを共有する。 ☆長さについて物の特徴に合わせた比較の方法を考え、説明している。（発言）

まとめ	○本時で学習したことを振り返る。 ・折って比べる方法が分かった。 ・次は写し取る方法で比べてみたい。	◇分かったことやもっと知りたいこと、思ったことを書く。

7　協議会記録

（視点１　問題解決型学習）

・一人一枚新聞を配ったことがよかった。
・応用の記事は、見た目ではどちらが長いか分からず、解決しようという意欲が高まった。
・道具を使わないことで、直接比較の有効さが伝わった。
・前時との条件の違いを児童が理解することが必要だった。
　（前時は２つの物を並べて比べる。本時は、１枚で比べる。）
・新聞の記事の内容に目が向いてしまった児童がいた。
・「折って重ねる」という考え以外の意見も出ていたので、それらを次時につなげていくとよい。
・「折って重ねる」という考えのよさへの気付きをさらに引き出せるとよかった。

（視点２　学び合い）

・ペア活動の際は、お互いの机をつけて活動するとよかった。
・子供たちの新聞紙にも赤線（縦）と青線（横）が引いてあれば分かりやすかった。
・ペアの時間が、二人の考えを共有するのか、一緒に考えるのか混同していたので、どちらの活動かをはっきりする必要があった。
・「端をそろえる」ことを折る場合にも大切であることを理解させる必要があった。

（視点３　NIE）

・新聞紙は、柔らかくて折りやすそうだった。
・身近な新聞を使ったことで、学習への意欲を高めることができた。
・新聞紙は、記事を読みたくなってしまうことがあった。
・新聞紙は、文字が書いてあるため、上下左右が分かりやすい。また、エコである。

8　指導講評

講師：北区教育委員会事務局教育振興部教育指導課指導主事　千田　聡　先生

・児童が主体的に学習に取り組んでいた。
・児童の「したい、してみたい」という思いをつなげながら、授業展開していってほしい。
・先生が、児童に賞賛や認める言葉をさらに多く掛けることが大切である。

講師：日本新聞協会 NIE コーディネーター　関口　修司　先生

・準備が大変だったと思う。
・便箋より新聞の方がよい。
・NIE をやっているからこその新聞が出てくる発想である。
・小学生新聞の大きさは、児童の机に合った大きさでちょうどよいのではないか。児童の体にとって少し大きいくらいの方が、子供たちは扱いやすいのかもしれない。
・ペア活動は積極的に取り入れていくことが大切である。そのときに大事なのは、声をしっかり出すことである。また、声が聞こえて称賛の流れができるように、場の設定や価値付けをしていく。声がなければ、学び合いはできない。
・一人ではなく、二人でないとできない仕掛けを作ることが必要である。そうすることで、自然と学び合いができるようになる。

・問題解決型の学習に迫るために何かしらの発見があり、相槌を打てるような場面や瞬間を設定することが大切である。授業中にいくつかの場面を設けるよう工夫していく。発見の「あいうえお」の場面【「あっ！」（ひらめき）「いいね！」（共感）「うっそー！」（驚き）「え、そうなの？」（懐疑）「おお、そうなんだ！」（納得）】を意図的に設定する。

9　成果と課題

○成果

・新聞は児童にとって身近であり、一人一枚配ったことが、学習への意欲を高めることにつながった。

・新聞紙は、折っても跡が残らないので考え直しが行いやすい。

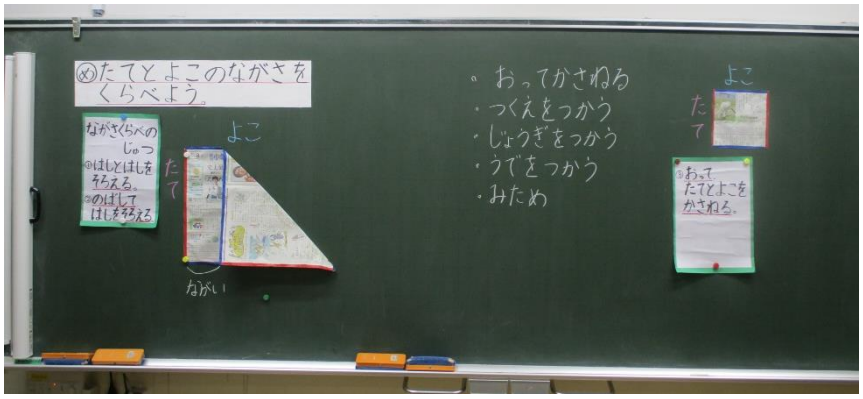
・新聞紙は、上下左右が分かりやすいため、縦・横を把握しやすく、縦の長さと横の長さを比べる活動には適していた。

△課題

・比べ方を考えさせる際に、条件の設定を行う。

・比較対象によって比較方法が変化することを押さえる。

＜板書＞



＜授業＞

ペアで交流

一人で比べ方を考えている

【新聞活用学習】　　第２学年　　国語科学習指導案

２年３組３４名

１　単元名

かたかなの　ひろば

２　単元の目標

□片仮名を書くとともに、文の中で使うことができる。

□語と語や文と文との続き方に注意することができる。

３　単元について

児童は、生活上では幼いときから「ママ」「パパ」「バス」「ピアノ」など、たくさんの片仮名言葉に囲まれている。本教材で出てくる片仮名は、どの語もなじみがあるものの、児童は、平仮名と片仮名のどちらを用いて書く言葉か、あまり意識をしてはいないように感じる。どんな言葉を片仮名で書くのがよいかという意識は、本教材のような学習を重ねることで自然に形成されていくことが期待される。

本教材で取り上げる語句は、主に、体育・運動に関わるものだが、この他にも、他の教科、生活の場面、持ち物など条件を設定できる。第２時では様々なカテゴリの新聞記事を取り上げる。記事ごとに片仮名を用いる言葉を集めて、短文作りに取り組ませることで、語彙を増やし、生活の中で活用できるようにしていきたい。また、自分一人では意味が分からない言葉も、話し合い活動を通して理解していけるようにしていく。片仮名を用いた語句を使って文を作ることで、学習したことを日常生活に生かしてけるよう、指導していく。

４　研究主題とのかかわり

（１）問題解決型の学習に迫るために

〇新聞記事の中から片仮名の言葉を探す活動を通して、身近な生活と片仮名が結びついていることに気付けるようにする。

〇文の形を示すことで、語と語の続き方に注意しながら、片仮名の言葉を使った文を書き表すことができる。

（２）児童が学び合って解決するために

〇班の形で学習することで、意味が分からない言葉があった際に教え合ったり、言葉の意味を互いに考えたりできる。

〇班で活動することで、より多くの片仮名を見付けることにつなげる。

〇記事によって付箋の色を変えることで、どの記事から誰が見付けた言葉なのか分かりやすくなり、児童同士の学び合いにつなげる。

（３）NIE との関連

〇片仮名で書く言葉が多くある記事を選ぶことで、児童の興味を高める。

〇記事全体を提示することで、前後の文章や写真から片仮名の意味をとらえやすくする。

〇新聞記事を利用することで、生活の中に片仮名で書く言葉があることに気付きやすくする。

5　単元の指導計画（２時間扱い）

問題把握：問、解決：解、学び合い：合、まとめ：ま

時	本時の目標（〇） 主な活動内容（・）	◇評価規準（評価方法） □使う資料（NIE）
1	〇片仮名で書く言葉に興味をもち、片仮名を使って文を書くことができる。 問　解　合　ま ・教科書にある片仮名の読み方を確認する。 ・書いてある片仮名以外の片仮名の言葉を探す。 ・絵をもとに、語と語の続き方に注意し、片仮名の言葉を使って文を書く。 ・書いた文を読み合う。 ・学習のまとめをする。	◇片仮名で書く言葉に興味をもち、片仮名を使って文を書いている。（ワークシート） ◇語と語や文と文との続き方に注意している。（ワークシート）
2 （本時）	〇新聞記事から片仮名で書く言葉を集め、片仮名を使った文を書くことができる。 問　解　合　ま ・生活班になり、新聞記事の切り抜きから、片仮名の言葉を見付ける。 ・言葉の意味について、班で確認する。 ・見付けた言葉を使って文を書く。 ・書いた文を読み合う。 ・学習のまとめをする。	◇片仮名で書く言葉に興味をもち、集めた言葉を使って文を書いている。（ワークシート、観察） ◇今までの学習をいかし、進んで片仮名を使った文を書こうとしている。（観察） □新聞記事切り抜き

6　本時の展開（２／２時間）

（１）本時の目標

□片仮名で書く言葉に興味をもち、片仮名を使って文を書くことができる。

（２）展開

	〇主な学習活動 ・予想される児童の反応	◇指導上の留意点　□主な資料（NIE） ☆評価（評価方法）
問題把握・見通し	〇前時の学習を振り返る。 〇本時のめあてを確認する。 かたかなのことばをあつめて、文を書こう。	□前時のノート

解決・学び合い	○新聞の切り抜きから、片仮名の言葉を集める。 ・生活班の形になり、配布した新聞記事の中から興味のある記事を選ぶ。 ・記事の中から片仮名で書く言葉を探す。 ・見付けた片仮名を、付箋に書いて画用紙に貼る。 ・言葉の意味を班で考える。 ○集めた言葉を使って文を書く。 ・見付けた言葉を使って文を書く。 ・自分で読み直す。 ・書いた文を読み合う。	◇班で活動することで、より多くの片仮名を見付けさせる。 ◇大きい画用紙に言葉を集めることで、共有しやすくする。 ◇言葉の意味も考えさせ、班の中で共有するように伝える。 ☆片仮名で書く言葉に興味をもち、集めた言葉を使って文を書いている。（ワークシート） ☆今までの学習を生かし、すすんで片仮名を使った文を書こうとしている。（ワークシート） □新聞記事の切り抜き
まとめ	○学習の感想を書き、発表する。	

7　協議会記録

（視点１　問題解決型学習）

・意欲的に文を書いていたが、様々な文の形になっていたため、文例を提示した方がよかった。

・新聞記事から片仮名を探すことによって、片仮名で書く言葉がどのような言葉なのか気付き始めた。

（視点２　学び合い）

・班で見付けた片仮名の言葉を共有したことで、知らない言葉についても知ることができ、語彙を豊かにすることにつながった。

・新聞から見付けた片仮名を付箋に個人で書いた時点で言葉の意味を「知っている言葉」か「知らない言葉」かに分けておくと、その後の班活動での確認が円滑にできたのではないか。

（視点３　NIE）

・新聞を通して、身の回りに片仮名で書く言葉がたくさんあることに気付いたことがよかった。

・記事が手元にあることで、記事を手がかりに片仮名の意味を確認できていた。

（質疑応答）

・文例を提示した方がよかったのではないか。

→第一時で「なにが　どうする」の形で文を作った。第二時では、様々な種類の片仮名の言葉が出てくる。前時と同じ形で文を作るのは難しいと考えたため、文の形を提示せず活動を行った。

・付箋の効果は何か。

→言葉の意味を確認する際に、記事に戻ることを想定し、誰がどの言葉を書いたのかが明確になるような手だてとして色を変えた。

・新聞記事をどのように選んだか。

→児童にとって分かりやすい片仮名の言葉がなるべくたくさん載っている記事を選択した。また、選択した記事の内容が似たものにならないように班ごとに分けた。現段階で、記事の範囲がどこまでかを認識できない児童がいること、記事そのものだと裏面からも片仮名の言葉を探す児童がいること等を考慮し、今回は教師が選び、カラーコピーしたものを児童に選択させるようにした。

8　指導講評

講師：日本新聞協会 NIE コーディネーター　関口　修司　先生

・児童が意欲的に取り組み、本時のねらいは達成できていた。教科書の内容を押さえた上で、新聞を活用したことで児童がたくさんの片仮名に触れる機会をもつことにつながった。児童は、できる限り小さい頃から言葉のシャワーを浴び、たくさんの言葉と出会うことが大切である。

・単元の目標「語と語や文と文との続き方に注意することができる」の意味が分かりにくい。文になれば一番良いが、語と語のつながりでもよいのではないか。本時では、児童同士が読み合う際に、意味がつながらない文を修正し合っていた。

・文の中に複数の片仮名を入れることで、文のイメージが分かりやすくなったり、読み返した後におもしろさを感じたりすることができる。机間指導時に教師が複数の片仮名を取り入れている児童を見付け、全体に紹介することで複数の片仮名を取り入れて文を作ることのよさに気付くことができる。

・付箋の使い方については、複数の方法がある。今回の出典を明らかにするために色を分けて使用する方法もあるが、貼り付ける用紙に区切りがあるだけでも、出典は明らかになる。児童が知っているもの、知らないもので色分けをしても班の中で意味の確認をする際に明確になる。児童は、自分たちで工夫をして付箋を使用することもできるので、児童の実態やその後の仲間分けに生かせるような使い方を考えていくことが大切である。

9　成果と課題

〇成果

・新聞記事から言葉を探すことで、たくさんの片仮名の言葉があることに気付き、語彙を豊かにすることができた。

・小学生新聞を選んだことで、児童が親しみやすい内容だったため、記事の内容から言葉の意味を考えたり、確かめたりすることができた。

・グループで交流したことで、より多くの片仮名の言葉の中から選択して文を作ることができた。

・グループで書いた文を読み合う活動を通して、言葉の意味の理解を深めたり、文と文のつながりを意識したりすることができた。

△課題

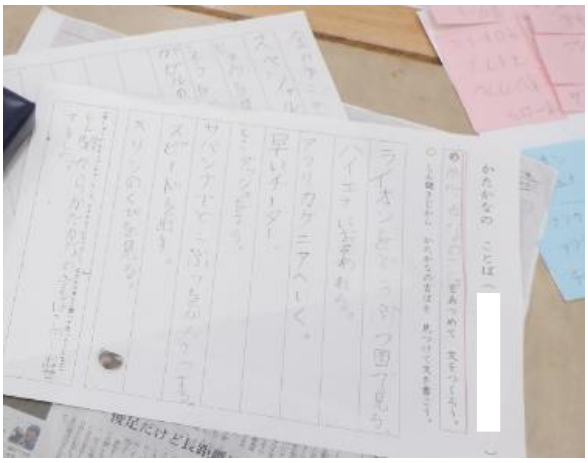
・文末が体言止めになっている児童がいた。机間指導時に文末の表現を確認することで、今後学習する主語・述語の形を意識させることができる。

【新聞記事から片仮名の言葉を探す】
（個人）

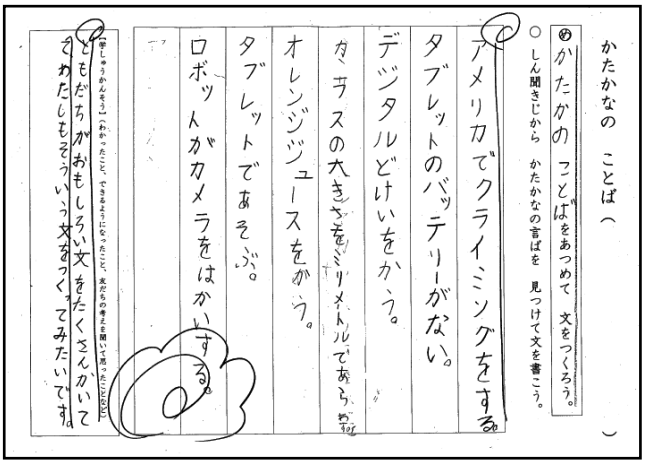
【見付けた言葉を付箋に書く】
（個人）

【班で見付けた言葉を使って文を書く】
（個人）

【書いた文を友達と交流する】
（班）



【文作り用ワークシート】



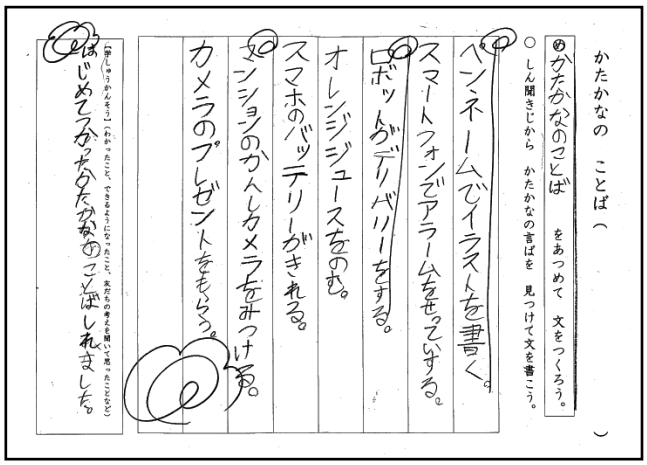
かたかなの　ことば（　　）

かたかなのことばをあつめて　文をつくろう。

しん聞きじから　かたかなの言ばを　見つけて文を書こう。

アメリカでクライミングをする。
タブレットのバッテリーがない。
デジタルどけいをかう。
カ　サスの大きさをミリメートルであらわす。
オレンジジュースをかう。
タブレットであそぶ。
ロボットがカメラをはかいする。

（学しゅうかんそう）（わかったこと、できるようになったこと、友だちの考えを聞いて思ったこと など）
ともだちがおもしろい文をたくさんかいてわたしもそういう文をつくってみたいです。



かたかなの　ことば（　　）

かたかなのことば　をあつめて　文をつくろう。

しん聞きじから　かたかなの言ばを　見つけて文を書こう。

ペンネームでイラストを書く。
スマートフォンでアラームをセットする。
ロボットがデリバリーをする。
オレンジジュースをのむ。
スマホのバッテリーがきれる。
マンションのかんしカメラをみつける。
カメラのプレゼントをもらう。

（学しゅうかんそう）（わかったこと、できるようになったこと、友だちの考えを聞いて思ったこと など）
はじめてかったかたかなのつづりはしれました。

【新聞機能学習】　　第３学年　　国語科学習指導案

３年２組３０名

１　単元名

生活の中で読もう　「ポスターを読もう」

２　単元の目標

□文章を読んで理解したことに基づいて、感想を伝え合うことができる。

□比較や分類の仕方を理解し使うことができる。

３　単元について

児童の日常生活には、情報媒体があふれている。本単元は、その媒体の接し方を学ぶ目的で設定された学習である。校内、町中、駅などに貼られているポスターを目にする機会は多いが、その内容を正確に読み取っているかと言えばそうではない。興味のあるもの以外は何気なく眺めていることが多いと思われる。児童がこれから多くの情報媒体と接していく中で、まずは１枚の中に伝えたいことがまとめられているポスターを取り上げ、盛り込まれた情報を正確に捉えられるようにしたい。さらにポスターの具体的な言葉や写真、絵や図を根拠にして、人を引き付ける工夫について説明する活動を設定する。また、ポスターの内容やレイアウトは、知らせたい相手や制作した目的に応じて考えられたものであることに気付かせ、情報を発信する側にも目を向けられるようにしたい。

本校の児童は「NIE たいむ」などを通して新聞を手にすることが多い。そこで、新聞もポスターの工夫が当てはまらないかどうかを考える時間を設けた。新聞の内容を正しく読み取り、相手を意識した工夫を見付けることは、様々な媒体の中のポスターにある情報を読み取ることに役立つだろうと考える。

４　研究主題とのかかわり

（１）問題解決型の学習に迫るために

○ポスターとは何か、どのような工夫がなされているかをしっかりと理解できるように単元を構成する。その上で教科書に例示されている２枚のポスターを比較することで、誰に対してどのような目的で制作されるかによって内容やレイアウトに明らかな違いがあることに気付けるようにする。

○観点を示したワークシートを活用することで、確実な理解へとつなげる。

○教科書に例示された２つのポスターは、一般向けと市内に住む人や子供連れのファミリー向けに書かれている。この違いは、新聞の一般紙と小学生新聞との違いにも当てはまるのかを考える活動を１時間設定することで、新聞機能の理解が深まり、他教科等での新聞製作で活用できるようにする。

（２）児童が学び合って解決するために

○児童が各自気付いたことをグループで紹介する時間を設け、互いの考えを知ることができるようにする。

○グループで話し合ったことを短冊に表し掲示することで、共有しやすいようにする。

（３）NIE との関連

○「NIE たいむ」の時間に記事の内容を読み取る活動を取り入れ、見出しと内容の関係などに着目できるようにする。

○ポスターだけにとどまらず、新聞を取り上げることで、新聞に対する興味関心を高める。

5　単元の指導計画（３時間扱い）

問題把握：問、解決：解、学び合い：合、まとめ：ま

時	本時の目標（〇） 主な活動内容（・）	◇評価規準（評価方法） □主な資料（NIE）
1	〇「ポスターのれい」に取り入れられた工夫や意図について、感想や考えをもつことができる。 問　解　合　ま ・ポスターについて知っていることを発表する。 ・「ポスターのれい」を見て、工夫していると思うことをノートにまとめる。 ・「ポスターのれい」について気付いたことを出し合う。 ・学習のまとめをする。	◇ポスターを読み、工夫や意図について考えている。 （ノート） ◇ポスターの特徴を理解している。（ノート）
2	〇２つのポスターを比較して読み、作られた目的や知らせたい対象などについて、自分の考えをもつことができる。 問　解　合　ま ・２つのポスターを比べ、どちらのポスターの方がお祭りに行きたくなるか考える。 ・２つのポスターを比べて読み、どのような違いがあるのか考え、気付いたことを整理する。 ・ポスターに違いが生じる理由を話し合う。 ・学習のまとめをする。	◇ポスターの言葉と写真、絵などを結び付けて制作の目的や知らせたい相手を考えている。 （ワークシート） ◇すすんでポスターの中の情報を読み取り、学習課題に沿って考えたことを友達と伝え合おうとしている。（観察）
3 （本時）	〇２つのポスターと一般的な新聞・小学生新聞の共通点を考えることができる。 問　解　合　ま ・ポスターにはどのような工夫があるか思い出す。 ・「NIE たいむ」などで読んでいる新聞には、一般紙と小学生新聞があるが、ポスターの工夫は当てはまるのか、同じ事柄を取り上げた記事を読み比べて考える。 ・気付いたことを短冊に整理し、新聞にも同じ工夫があることを確認する。 ・学習のまとめをする。	◇一般的な新聞と小学生新聞とは、ポスターのように、目的や知らせたい相手を踏まえて書かれているか、すすんで読もうとしている。 （ワークシート） □新聞記事

６　本時の展開（３／３時間）

（１）本時の目標

□２つのポスターと一般的な新聞・小学生新聞の共通点を考えることができる。

（２）展開

	○主な学習活動 ・予想される児童の反応	◇指導上の留意点　□主な資料（NIE） ☆評価（評価方法）
問題把握・見通し	○ポスターはどのような工夫があるか発表する。 ・キャッチコピーがある。 ・知らせたいことを短い文や言葉で表している。 ・絵や写真がある。 ・カラーで印刷されている。 ・見てほしい相手によって書かれている言葉や写真、図などが違う。 ポスターのとくちょうは、新聞にも言えるのか、記事を見て考えよう。	◇前時の学習を思い出すよう、ノートを見てもよいことを伝える。 ◇２つのポスターを提示し、ポスターの特徴を確認する。
解決・学び合い	○ポスターの知らせたい対象によって書きぶりが違うことは、新聞の一般紙と小学生新聞に当てはまるか、同じ事柄を取り上げた新聞記事を読み比べ、似ているところや気付いたことをワークシートに書く。 ・見出しは大きく書かれていて、ポスターのキャッチコピーに似ている。 ・小学生新聞にはふりがなが付いていたり、文が分かりやすかったりして、読む相手を考えている。 ・写真があって分かりやすい。 ○各自でまとめたワークシートを持ちより、グループで分担して短冊に書き、黒板に掲示する。 ○学級全体で掲示された短冊を見て、新聞はポスターと似ているところがあることを確認する。	◇児童に分かりやすく読みやすいように、一般紙と小学生新聞の記事は教師が選んだものを提示する。 □同じことを取り上げた一般紙と小学生新聞の記事 ◇書き出せない児童には、見出しやイラスト、図、写真などの観点を示し、気付いたことを引き出すようにする。 ☆一般的な新聞と小学生新聞は、ポスターのように、目的や知らせたい相手を踏まえて書かれているか、考えている。 （ワークシート） ◇生活班で話し合ったことを短冊に書き、学級全体で共有することを伝える。 ◇新聞にもポスターの特徴が当てはまることを押さえる。

まとめ	○感想を発表する。 ・新聞にもキャッチコピー（見出し）や写真がある。	◇ポスターの特徴は新聞にも当てはまるところがあることを押さえ、自分で新聞を書くときに活用できることを伝え意欲を高める。

（３）資料

【児童に提示した新聞記事】

読売新聞８月１０日夕刊→

一般紙

2023.8.10 読(夕)

暑すぎる

熱中症死者 年1300人 最近5年

7月気温 過去最高

「地球沸騰の時代」

毎日小学生新聞７月２９日↓

小学生新聞

環境

「地球沸騰の時代」 史上最も暑い７月に

国際連合（国連）の組織「世界気象機関（ＷＭＯ）」と、ヨーロッパ連合（ＥＵ）の気象情報機関「コペルニクス気候変動サービス（Ｃ３Ｓ）」は27日、今年７月は観測史上、最も暑い月になる可能性が極めて高いと発表しました。国連のグテレス事務総長は「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰の時代が来た」として、温暖化対策の強化を訴えました。

Ｃ３Ｓによると、７月１～23日の世界の平均気温は16・95度で、これまで最高の2019年７月の月間平均16・63度を上回っています。１日平均でも、過去最高だった16年８月13日の16・８度を超える日が相次ぎ、特に７月６日は17・08度と過去最も暑い日になりました。温暖化対策では、産業革命前からの気温上昇を１・５度に抑えるのが世界の目標ですが、７月前半は一時、１・５度を超えたそうです。

アメリカ・カリフォルニア州のデスバレー国立公園で「54度」と表示された温度計の前に立ち、記念撮影する女性＝７月16日、ＡＰ

2023.7.29 毎日小

7　協議会記録

（視点１　問題解決型学習）

・前時のポスターの学習の流れと同じだったので、スムーズに活動に取り組めていた。

・新聞の読み取り（内容理解）がよくできていた。

・ポスターと新聞との比較よりも、新聞同士の比較をしていたように見えた。

・知らせたい相手によって、書かれている内容が変わることをまとめとしてもう少し押さえておくとよかったのではないか。

（視点２　学び合い）

・グループの活動では、お互いの意見を受け入れて話し合っていた。

・自分では気付かなかったことを、グループでの学び合いで気付いた児童が多くいた。

・児童同士の交流で考えの深まりや広がりが見られた。

・グループでまとめた意見が手元に残るようにするとよかったのではないか。

（視点３　NIE）

・文章の内容ではなく、新聞の構成に着目していた。

・新聞への興味を引き出せた資料であった。

（質疑応答）

・比較の視点がなぜポスターと新聞だったのか。

→研推での話し合いでは、新聞の広告を使えばよりポスターに近いのではないかとの案も出たが、広告を取り上げるのであれば内容を検討する必要であること、今後の新聞製作につなげるには、やはり新聞記事を取り上げることが望ましいと考えたからである。

・教師が提示した新聞記事を選んだ観点を知りたい。

→児童に提示する記事の選定は苦労した。いくつか候補があったが、記事の内容ではなく、見出し、写真などのビジュアル面で、この猛暑について（地球沸騰の時代）の記事が捉えやすいと考えて決めた。

・ポスター２つの比べ合いと新聞２種の比べ合いをしてから共通点を見付けるという流れの方がよかったのではないか。

→児童の実態から、ポスター同士の比べ合いを学び、共通点や相違点を学んだからこそ本時があると考えた。実際に、児童は前時を思い出しながら活動に取り組んでいた。

8　指導講評

講師：日本新聞協会 NIE コーディネーター　関口　修司　先生

・今回の学習は新聞の機能を学びながら活用していた。（新聞機能学習であり、新聞活用学習でもある）また、さらに新聞制作に生かしていける内容であった。

・新聞が最終的に目指すのはメディアリテラシーを高めることである。メディアをどう利用することが望ましいかを考えられるようになってほしい。

・本時は正確に内容を読むのではなく概要を捉えればよかったが、児童は内容も読んでいた。一般紙と小学生新聞との比較は深い学びにつながる。

・相手に必要な情報を伝えるという点では、ポスターと新聞は共通している。ポスターの比較は新聞の広告も活用できる。しかし、広告は内容を吟味する必要がある。

・今回の学習によって、新聞の理解が深まったり広がったりすることにつながった。

９　成果と課題

〇成果

・基の単元から１時間増やし、比較の対象をポスターから新聞に広げたことで、新聞への理解が深まり、興味・関心も高まった。

・グループでの話し合いでは、一人一人の考えが対話を通して変容する姿が見られ、個の理解も深まった。

・グループでまとまったことを短冊に書いて貼ることで、文字での交流ができていた。

△課題

・ポスターも新聞も、知らせたい相手によって、レイアウトやキャッチコピー、見出し、書かれている内容が変わることを、もう少ししっかりとおさえておくとよかった。本時の学習の振り返りの時間を確保し、学習内容を確認するようにしたい。

【新聞活用学習】　　第４学年　　社会科学習指導案

４年３組２５名

１　単元名

自然災害からくらしを守る「水害からくらしを守る」

２　単元の目標

□自然災害から地域の安全を守るために、東京都や区、地域の関係機関や人々は様々な対処や備えをしていることについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、見学や観察などの調査活動、写真・地図・年表などの具体的資料を通して、必要な情報を調べ、まとめる技能を身に付ける。

□過去に発生した地域の自然災害と被害状況の変化に着目して問いを見いだし、自然災害から人々の安全を守る活動とその働きを考えたり、自分たちにできることを選択・判断したりして、文章で記述したり、資料などを用いて説明したり、話し合ったりする力を養う。

□学習問題を追究・解決するために、自然災害から人々を守る活動について予想や学習計画を立てたり、意欲的に調べたり考えたりして、そのことを表現しようとする主体的な学習態度を養う。また、地域社会の一員として、学習したことを基に自然災害に対する日頃からの備えに取り組んだり、関係機関に協力したりしようとする意識を養う。

３　単元について

東京都では様々な自然災害が発生しているが、その中でも水害が多い。過去に発生した台風や豪雨などによる多摩川や荒川、隅田川等の堤防の決壊による被害は大きかった。その後、東京都や区、地域、人々の取り組みにより、被害は大幅に減少している。その一方で、近年の地球温暖化の影響等による豪雨のため、全国的に河川の氾濫や土砂災害、下水道からの漏水などの被害が起きており、その報道を児童も真剣に受け止めている。本校の学区域は北区内でも高台にあり、水害に対する危機意識は高くはない。しかし、崖崩れによる土砂災害や都市型の災害は想定されている。

それらの歴史的な事柄や現在の様子から問題を見いだし、様々な資料を活用して追究・解決することは、児童にとって興味深いことであると同時に必要感も高いと思われる。そこで、新聞やタブレットを活用して資料を探し、それらを読み取って考えたことを話し合ったり、まとめたりする活動を通して問題解決力を育てていきたい。また、北区内に「知水資料館 amoa」があるので、その見学を通して学びを深めることができると考える。さらに、総合的な学習の時間に「われら、荒川探検隊！」を設定し、荒川の治水の歴史や岩淵水門、荒川放水路の役割とさらなる取り組みについて追究する予定である。

４　研究主題とのかかわり

（１）問題解決型の学習に迫るために

○学習問題を踏まえ、各時間の問いを「誰が」「どのような取り組みをした」という視点に絞って、児童が立てられるようにする。予想の段階で「人」と「取り組み」を分類しながら板書し、解決の見通しをもてるようにする。

○主体的に問題解決型の学習に取り組めるように、児童が自分の学び方の目標をもち、単元の終末に振り返りを行う。(①発言、②ノート、③学び合い・交流)

○荒川知水資料館の見学を設定し、川の様子や都と区の治水対策の様子をつかめるようにする。

（２）児童が学び合って解決するために

○交流の場面では、「ペアトーク」「グループトーク」「旅人トーク」「お助けトーク」「サイレントトーク」などを設定し、児童が自分の立場や目的に合わせて、学び合いの方法を選択できるようにする。

※学び合いの方法のパターンは以下の５つとする。

①ペアトーク
・短い時間で考えを交流したいときや友達の考えと比べたいとき等に、隣りの友達と２人で話す。
②グループトーク
・短い時間で自分と違う考え方を知りたいときや考えを一つにまとめたいとき等に、グループの友達（３人以上）と話す。
③旅人トーク
・自分の考えと友達の考えを比べて、新しい発見をしたいときに、旅人トークを選んでいる友達と話す。
④お助けトーク
・困っている友達と助けたり、できている友達に助けを求めたりする。
⑤サイレントトーク
・もう少し一人で考えたいときや修正したいときに使う。

（３）NIE との関連

○単元導入場面で、水害と自分たちの生活の関わりについて、実際の水害に関わる新聞記事を読み、身近な社会的事象であることをつかめるようにする。

５　単元の指導計画（１２時間扱い）

問題把握：問、解決：解、学び合い：合、まとめ：ま

時	本時の目標（〇） 主な活動内容（・）	◇評価規準（評価方法） □主な資料（NIE）
1	○東京都で起こった自然災害と地形との関係に気付く。 問　合 ・自然災害が起こった場所を白地図に書き込み、自然災害と地形との関係について考え、話し合う。	□白地図 ◇地形により起こりやすい自然災害が異なることに気付き、表現している。（発言・ノート・白地図）
2（本時）	○大雨の回数は大きく変化していないが、浸水被害件数が大幅に減少していることに着目し、学習問題をつくる。 問　合 ・写真や映像、新聞記事から、水害を身近な社会的事象としてとらえ、被害の様子を知る。 ・大雨の回数と浸水被害件数のグラフを比較し、疑問に思ったことや気付いたことを話し合う。 ・気付いたことから問いを作る。 ・問いに対する予想をする。（個人→少人数交流） ・気付いたことや疑問を全体で共有し、学習問題を設定する。 学習問題　被害を減らすために、誰が、どのような取り組みをしているのだろうか。	□教科書 p. 46①②の写真 □新聞記事（朝日新聞：2019 年 11 月 13 日「『緊急放流か』満水に迫った」） □動画（ANN NEWS：2019 年 10 月 13 日「救助要請相次ぐ　二子玉川・武蔵小杉で大規模冠水」） ◇水害対策には、「人」と「取り組み」が関わっていることに気付き、問いを見いだしている。（発言・ノート）
3	○学習問題を解決するための学習方法や学習計画を考える。 問　合 ・前時の学習から、水害対策に関わる「人」と「取り組み」の視点から予想する。 ・調べる手順と方法を考え、学習のまとめ方を計画する。	◇学習問題を解決するために調べる内容を明らかにして、手順や方法、まとめ方を具体的に計画している。（発言・話し合い）

4	○北区が行っている水害を防ぐための取り組みを調べ、その働きを考える。 解　合 ・問いに対する予想を立てる。 ・インターネット等を活用し、北区の取り組みを調べる。 〈気付かせたい取り組み〉 情報収集と発信、防災会議、都との連携 ・問題解決のために交流の方法を選択し、交流する。 ・学習した内容をまとめる。	◇北区の取り組みやその働きについて、理解している。（発言・ノート） □北区ハザードマップ □北区ホームページ
5 ・ 6	○東京都が行っている水害を防ぐための取り組みを調べ、その働きを考える。 解　合 ・問いに対する予想を立てる。 ・副読本 p.50、51 やインターネット等を使って、東京都の取り組みを調べる。 〈気付かせたい取り組み〉 護岸工事、地下調整池、公園貯留等、上流域の森林の保全 ・問題解決のために交流の方法を選択し、交流する。 ・学習した内容をまとめる。	◇東京都の取り組みやその働きについて理解し、北区の取り組みとの違いや共通点を踏まえ、表現している。（発言・ノート） □TOKYO 強靭化プロジェクト □マイタイムライン
7 8	○荒川知水資料館を見学し、都や区の取り組みを調べる。	□荒川知水資料館
9	○水害を防ぐための地域の人の取り組みを調べる。 解　合 ・問いに対する予想を立てる。 ・インターネット等を使って、地域の人の取り組みを調べる。 〈気付かせたい取り組み〉 合同防災訓練、災害対応備品 ・問題解決のために交流の方法を選択し、交流する。 ・学習した内容をまとめる。	◇地域の人々の取り組みについて理解し、区や都の取り組みとの違いに気付き、自分の言葉で表現している。（発言・ノート） □北区水防災シンポジウムワークショップ成果の発表
10 11	○学習問題について調べて分かったことや考えたことを関連図にまとめる。 合　ま ・前時までの学習を振り返り、東京都、北区、滝野川地区のつながりについて考えたことを関連図にまとめる。 ・学習問題に対する自分の考えをまとめる。	◇水害を防ぐための取り組みを都、区、地域のつながりを意識して、関連図にまとめている。（関連図）
12	○自分たちの身を守るために、自分たちにできることを考える。 合　ま ・小学生の自分にできることを考え、話し合う。 ・自分が立てた単元の目標の振り返りをする。	◇自分たちの生活との関わりを意識して、自分たちにできることを考えている。（発言・ノート）

６　本時の展開（２／１２時間）

（１）本時の目標

□大雨の回数は大きく変化していないのに、浸水被害件数が大幅に減少していることについて疑問をもち、自分なりに予想をすることができる。

（２）展開

	○主な学習活動 ・予想される児童の反応	◇指導上の留意点　□主な資料（NIE） ☆評価（評価方法）
問題把握・見通し	○前時の学習を振り返る。 ・東京都全体で自然災害が起こっていた。 ・自然災害の中でも水害が一番多かった。 ○写真や映像、新聞記事から、水害を身近な社会的事象としてとらえ、被害について考える。 ・家が流されている。 ・水が溢れている。 ・土砂崩れで車が埋まってしまっている。 ○副読本 p. 47③④のグラフを読み取る。 ○東京都の大雨の回数と浸水被害を受けた建物の数（副読本 p. 47③④）の関係について考える。 ・大雨の回数は、増えたり、減ったりしている。 ・被害は減ってきている。 ○本時の問いを確認する。	◇前時の学習を振り返るために、前時にまとめた白地図を教室に掲示する。 ◇水害の被害を身近な社会的事象として捉えられるようにするために、写真や映像、新聞記事を提示する。 □副読本 p. 46①②の多摩川水害の写真 □写真（東京防災ホームページ：平成 20 年８月末豪雨　八王子市初沢） □新聞記事（朝日新聞：2019 年 11 月 13 日「『緊急放流か』満水に迫った」） □動画（ANN NEWS：2019 年 10 月 13 日「救助要請相次ぐ　二子玉川・武蔵小杉で大規模冠水」） ◇グラフの大きな変化に着目する児童には、見る視点を変える言葉掛けをする。 ◇グラフは、大雨の回数に大幅な変化がないことと浸水被害が減っているという事実を整理するために、一緒に読み取りを行う。
	問い　なぜ、大雨の回数は大きく変化していないのに、浸水の被害が減っているのだろうか。	
解決・学び合い	○問いに対する予想をする。（個人） ・何か工夫をしていたのではないか。 ・氾濫を防ぐために、堤防を作ったのではないか。 ・土砂崩れしないように、柵を作ったり、道路を整備したりしたのではないか。 ・ダムをたくさん造って、水があふれないようにしたのではないか。 ○自分に合った学び合い方を選択し、交流する。（小集団→個人） ○全体で共有し、学習問題を作る。	◇被害を少なくするような取り組み等を写真や映像、新聞記事から考えることができるように、言葉掛けをする。 ☆大雨の回数は変化がないのに、被害件数が減っていることに疑問をもち、問いを見いだしている。（発言・ノート）
	学習問題　被害を減らすために、誰が、どのような取り組みをしているのだろうか。	
まとめ	○自分の学び方の目標を設定する。 ・調べたことを分かりやすくノートにまとめる。 ・調べたことを短い言葉で整理する。	◇自分に合った目標を設定するために、前単元までの取り組みを振り返るよう言葉掛けする。

（3）資料

2019 年 11 月 13 日：朝日新聞

朝日新聞　2019年11月13日　朝刊　25ページ　東京四域

「緊急放流か」満水に迫った

検証 台風19号 ～東京と災害～

あの日 荒川は東京を守った 上

台風19号の上陸から1カ月が経った。各地で河川が氾濫し、浸水や土砂崩れなどの被害が広がった。だが、荒川の本流は、堤防の外に一滴の水も漏らさなかった。背景には、荒川と、荒川を管理する人たちのぎりぎりの闘いがあった。

台風が近づく10月12日夜。国土交通省荒川下流河川事務所の榆森裕司副所長は流域の水位データを睨んでいた。荒川と隅田川を隔てる岩淵水門近くの事務所。窓の外で、印象的な青い水門が豪雨にかすんでいた。

荒川上流域の埼玉・熊谷の水位計が上がり続けていた。「これは、まずい」

江戸時代、荒川は現在の隅田川の位置を流れていた。明治末の治水工事で、荒川は人工の川「荒川放水路」と、隅田川とに分けられた。その分離点にあるのが岩淵水門だ。

水門は普段は開かれ、荒川の豊富な水を流して隅田川の水質を保っている。だが、剛健な荒川の堤防に対し、コンクリート壁を建てただけの隅田川の堤防は低く、弱い。大雨などで水位が4㍍を超えたら岩淵水門を閉鎖し、隅田川下流域を守ることになっている。

12日午後8時50分、水門閉鎖。隅田川に水を流せなくなり、孤立無援となった荒川の水位が一気に上がった。「頑張ってくれ」。榆森副所長は、祈った。

この少し前。荒川最上流部の二瀬ダム（埼玉県秩父市）でも、ダム管理所の吉沢真一専門官が水位計をにらんでいた。

5日ほど前から、二瀬ダムは24時間態勢で最大量を放水し続け、ダム水位を下げて雨の受け入れ準備を進めていた。だが、いざ台風が近づくと1時間に2㍍という猛烈な勢いで水位が上がっていった。吉沢専門官が初めて経験する雨量だ。

源流から流れ下ってくる水を、もう、ためられなくなりつつあった。

《12日午後10時から、二瀬ダムは緊急放流を行う》

そう決定された。緊急放流は水をためられなくなったダムが決壊回避のために行う最終手段だ。

だが、昨夏の西日本豪雨での鹿野川ダム（愛媛県）の緊急放流では下流域の3千戸が浸水し、5人が死亡（災害関連死1人を含む）した。なんとか回避したい。

「早くやんでくれ」。気象情報をにらみながら空に祈ったが、水位計は、なおも上がり続けた。満水まで5㍍に迫っていた。（抜井規泰）

上フル稼働した荒川第一調節池。両岸の河川敷に広がるゴルフ場や野球場は完全に水没した
下平常時の荒川第一調節池＝いずれも荒川上流河川事務所提供

©朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

参考資料

①2019 年 11 月 14 日：朝日新聞

あの日荒川は東京を守った 中

「ダムも調節池も　フル稼働」

②2019 年 11 月 16 日：朝日新聞

あの日荒川は東京を守った 下

「干潮で引いた水　脱した危機」

7　協議会記録

（視点１　問題解決型学習）

・資料から読み取ることを焦点化しながら、提示する形でよかった。

・前半の丁寧な読み取りは、水害による被害を“身近なこと”として捉えていくことにつながっていた。

・氾濫が起きた多摩川と氾濫を防いだ荒川の資料があったことで比べることができていた。

・２つのグラフから子供たちの「どうして被害が減ったのか」という疑問をもっと膨らませて学習問題につなげるとよかったのではないか。

（視点２　学び合い）
・児童同士が席を離れての交流で、自分が話し合いたい友達と学び合うことができた。
・前半部分の資料を読み取るところの時間を短くし、学び合いの時間をもう少し長く設定したらよかったのではないか。
（視点３　NIE）
・新聞を活用するかしないかを、自分で選べるスタイルはよいと思った。
・授業の流れの中で、ロイロノートの動画や写真の資料と新聞の両方が活用されていた。
（質疑応答）
・荒川の今と昔の写真や記事を比べた方が、子供たちが身近な川での水害の変化を捉えやすかったのではないか。
→東京都として捉えるために、荒川に限定せず、多摩川と荒川を扱った。昔の多摩川による水害の写真では水害の恐ろしさを知ることをねらいとし、2019 年の東日本台風の多摩川と荒川の比較では、同じ時の台風でも被害の様子に違いがあることに気付くことをねらいとしていた。

８　指導講評

講師：日本新聞協会 NIE コーディネーター　関口　修司　先生
・１単位時間で授業を考えていくのではなく、小単元として捉えて学習計画を立て、単元の目標を達成できるように考えると良い。
・４年生は、東京都全体を学習する必要がある。本時で荒川に焦点を当てるなら、多摩川を前時までに学習しておく必要がある。
・４年生の社会科では、組織的、協力的、計画的な活動を学ばせる。台風 19 号への備えは、５日以上前から準備されていた。鉄道を計画運休にし、その間に土嚢を積むなどしっかりと準備された上で、荒川が守られたのは運もよかった。
・人を意識しないと社会科ではない。今日は最後の学習問題の中に、人という言葉が出ていた。
・問題解決の流れが子供に染みついているのは、滝小の強みである。今日の授業の流れはよかったが、問題把握のところで子供にじっくり考えさせて疑問をもたせたい。
・自然な形で友達と話し合いができているのは、４月からの積み重ねの成果だと思う。
・NIE との関連で、水害に関する「あの日　荒川は東京を守った」の新聞記事を探して、活用したのはよかった。

９　成果と課題

〇成果
・資料を提示するタイミングについて検討を重ね、問いの前に水害に関する資料を提示することにより、水害の被害が減っている理由を予想することができた。
・写真、動画、新聞と複数の資料を提示することにより、児童は自分に必要な情報を得るために資料を選択することができた。その中でも、新聞記事を活用して考える児童が多く、新聞記事の中の写真や見出し、本文から水害や対策の様子を読み取ることができた。
・「ペアトーク」や「旅人トーク」など、自分に合った学び合い方を選択することで、全体では発言が難しい児童も自分の考えを伝え合うことができた。
△課題
・全体の時間配分を調整することが課題であった。前半の水害の被害を捉える部分や同じ時の水害でも場所によって被害が違うことに気付かせる部分を少し短くし、問いに対する予想に時間をかけられるとよかった。

＜板書＞

10/11(水) 水害からくらしを守る①
はじめに
低
高
水があふれている
家が流されている
土砂くずれ
車がうまっている
歩きにくくなっている
〈多摩川〉
荒れていた
水びたし
深さ1.5m
ボート
〈荒川〉
問い
水没(ゴルフ場など)
家の方に
予想
→堤防のおかげ?
上がったり下がったり
している。
一回多くなって
その後へっている。
なぜ、大雨の回数がふえたり、へったりしている
のに、被害はへっているのだろうか。
提防を作った
高くした
なべを作った
強度
マップ
ハザードマップ
住民が備えた
学習
問題
被害をへらすために、だれが、どのような
取り組みをしたのだろうか。

＜学習の様子＞

【新聞機能・活用学習】　　第５学年　　国語科・総合的な学習の時間学習指導案

５年３組２９名

１　単元名

新聞記事を読み比べ、意見文を書こう

２　単元の目標

□同じ題材の新聞記事を読み比べ、写真や見出しに気を付けて、それぞれの記事の内容や意図の違いを読み取ることができる。

□書き手の意図を考えながら、見出しの効果や工夫を読み取ることができる。

３　単元について

本単元は「読むこと」イ「目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること」、言語活動例　ウ「編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと」に基づいている。

現代の児童は、調べ学習で活用するものが本や新聞という紙媒体からインターネットという電子媒体が身近になり、多くのことを調べることができる。また、高学年になれば、インターネット上の情報が全て正しい情報ではないという危うさも知っている。数多くある情報の中から取捨選択をしながら、文章の読み方を広げていく必要が求められる。

本単元では、特に新聞の読み比べの仕方を中心に指導していく。同じ内容の記事でも表現が異なることに気付き、その記事の編集の仕方や書き方を変えていることを明らかにし、自分の考えたことをまとめる。そして、記事に対する自分の意見をもったり、疑問に思ったりすることを調べる活動につなげていく。また、グループ内でまとまった記事に対する考えを発表し、共有する。

４　研究主題とのかかわり

（１）問題解決型の学習に迫るために

○記事の読み比べ方、意見文の書き方における基礎・基本の知識・技能を単元の始めに身に付けさせる。身に付けた知識・技能を生かし、記事に対する自分の意見を明確に表現できるようにする。

○複数の新聞記事の中から自分が興味をもった内容や意見をもった出来事の新聞記事を抜粋することで、主体的な学びにつなげるための課題意識をもてるようにする。

（２）児童が学び合って解決するために

○教科書に掲載された記事を読み比べる際、児童同士の交流から気付いた読むポイントを基にまとめていく。

○選んだ記事を基にしたグループ編成を行い、相互の考えを交流しやすくする。

（３）NIE との関連

○いくつかの新聞記事を読み比べることで、出来事に対する理解が深まることが実感できる。

○本単元を通して身に付けた意見文の書き方を、NIE たいむ等につなげ、自分の考えを整理したり、深めたりする。

5　単元の指導計画（９時間扱い）

問題把握：問、解決：解、学び合い：合、まとめ：ま

時	本時の目標（〇） 主な活動内容（・）	◇評価規準（評価方法） □使う資料（NIE）
1	〇新聞の構成や特徴を理解し、必要な情報を見付けるための方法について考える。 問、合	◇新聞の構成や展開、特徴を理解した上で、必要な情報を見付けるための方法について考えている。（ノート）
2	〇２つの記事を比較し、それぞれの要旨を捉え、論の進め方などについて考える。 問、合	◇２つの記事の論の進め方を叙述や図表などを基に押さえ、それぞれのおおまかな要旨を捉えている。 （ノート）
3	〇新聞を比べて読む。 問、合 ・新聞の特徴を基に記事を選び、必要な情報を見付けて読む。	◇これまでに学習した新聞の特徴を生かして、自分の関心のある記事を選んでいる。（観察） □各種新聞記事
4	〇自分の興味のある記事を選ぶ。 解 ・新聞を読み、２～３つの記事を選ぶ。	◇選んだ記事の中から、自分にとって必要な情報を見付けて読んでいる。 （観察）
5	〇共通の記事で書き方を知り、意見文を書く。 解	◇記事を読む中で、出来事についての理解を深め、意見を書いている。 （ノート）
6 7 8	〇記事の書き方の相違点をまとめ、意見文を書く。 解、合 ・自分で選んだ新聞記事の中で、分からない言葉などを調べる。 ・相違点を見付け、意見文を書く。	◇記事を読む中で、出来事についての理解を深め、意見を書いている。 （観察・ノート）
9 （本時） 10	〇プレゼンテーションの準備をする。 解、合 ・グループごとに意見文を読み返す。 ・グループで、伝えたいことを考える。 ・聞いている人に伝わるように、プレゼンテーションの準備をする。	◇グループでの意見を基に、簡単なプレゼンテーションをしている。 （観察・ワークシート）
11 12	〇プレゼンテーションを聞き合い、考えたことをまとめる。 合、ま ・プレゼンテーションを行い、考え・感想を書く。	◇グループでの意見を基に、簡単なプレゼンテーションをしている。 （観察・資料）

６　本時の展開（９／１２時間）

（１）本時の目標

□新聞記事に対する意見文の妥当性を検討し、個々の意見のよさを見付け、グループの意見をより確実なものにすることができる。

（２）展開

	○主な学習活動 ・予想される児童の反応	◇指導上の留意点　□主な資料（NIE） ☆評価（評価方法）
問題把握・見通し	○発表のために必要な準備をグループごとに確認をする。 意見文をもとに、プレゼンテーションの準備をしよう。	□自分の選んだ新聞記事、資料 ◇グループで本時のめあてを共通理解が図れるようにする。
解決・学び合い	○グループごとに準備をする。 ・意見文を読み直し、キーワードを抽出する。 ・プレゼンテーションの準備に取りかかる。 ・発表の練習をする。	◇プレゼンテーションの資料は、話の流れが分かるよう、キーワードで表現する等の工夫をするよう伝える。 ◇意見文の内容が理解できるように、資料を作成するための助言をする。 □自分たちの選んだ新聞記事
まとめ	○次時の学習内容を知る。 ○学習の感想を発表する。	☆意見文を基に簡単なプレゼンテーションの計画をしている。（観察・ワークシート）

（３）資料

記事の内容	日付	新聞社				
人口１２年連続減少	R5.4.13	朝日	産経	東京	毎日	
液体水素車	R5.5.28	東京	読売			
吉野ヶ里遺跡から石棺	R5.5.30	東京	毎日	読売		
藤井七冠最年少名人	R5.6.2	朝日	産経	東京	毎日	読売
記録的豪雨	R5.6.4	朝日	東京	毎日	読売	
四大大会車いす　最年少制覇	R5.6.11	朝日	東京	毎日	読売	
男女平等　日本125位	R5.6.22	朝日	東京	毎日		

7　協議会記録

（視点１　問題解決学習）

・意見文をグループでまとめることは難易度が高いため、まとめずにそれぞれの意見文として伝える活動でもよかった。

（視点２　学び合い）

・意見を活発に交換していた。

・意見文を基に議論する活動を設定してもよかった。

（視点３　NIE）

・児童が選んだ記事であったことがよかった。

・記者の意見を明確に捉えてまとめていたグループがあった。

・全国紙と地方紙、ではなく全国紙同士となっていた。小学生新聞との比較だと、違いが分かりやすかったのではないか。

（質疑応答）

・「プレゼンテーション」がゴールになっていた。授業のゴールは何だったのか。

→自分で問題を見付けて解決に向かうことをねらいとしていたが、結論やまとめを出す活動が入っていたため、児童が活動の方向性を理解できていなかった可能性はある。グループによって記事へのアプローチが異なっていたため、そこから結論に至るまでの活動自体がゴールでもある。自分なりにアンテナを張り、考え、まとめ、話せることが重要だと考えていた。

8　指導講評

講評：北区教育委員会事務局教育振興部教育指導課　指導主事　千田　聡　先生

・授業中の指示が端的であり、児童に分かりやすいものであった。ワークシートも「何をすればよいのか」が分かりやすかった。

・ふだんの授業の積み重ねが表れた授業であった。

・児童の意見交換が活発であり、レベルが高いと感じた。

・第３グループの活動を中心に見ていた。意見の引き出し方やまとめ方が上手であった。

・「結論が出ないこともある」という結論を教師が提示したことで、活動が前に進んでいた。

・難易度の高い活動ではあったが、積み重ねとなり、児童の力となっていくはずである。

9　成果と課題

○成果

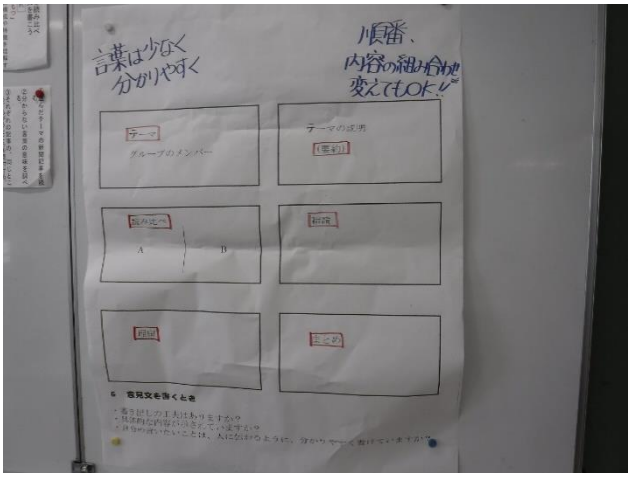
・幾つかある記事の中から、取り上げる記事を児童が選んだので、関心・意欲が高く、主体的な学びへとつながった。

・新聞記事の読み比べの活動をしながら内容を読み取り、自分の意見や考えをもつことができた。

・実際の新聞記事を扱うことで書き手の意図によって記事が変わることを実感し、新聞の機能についての理解が深まった。

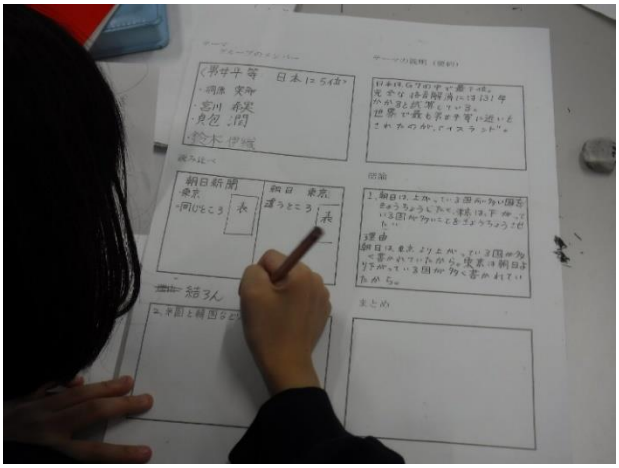
●課題

・グループごとに進度や精度の差があった。時間を区切って進捗を確認するとよかった。



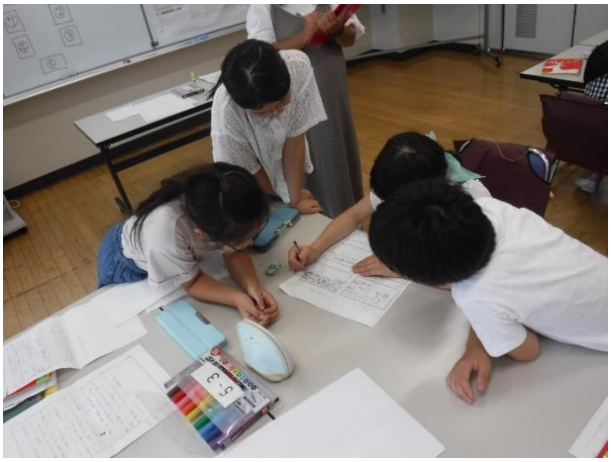
【ワークシートの説明】

【自分の意見を伝え合う】



【プレゼンテーションの構成案】

【伝えたいことの精選】



【プレゼンテーション準備】

【資料作成】

【新聞活用学習】　　第６学年　　算数科学習指導案

発展クラス　３４名
標準クラス　２４名
補充クラス　１２名

１　単元名

およその面積と体積

２　単元の目標

□身の回りにある物の形について、その概形を捉えることで、およその面積や体積を求められることを理解し、面積や体積を求めることができる。

□図形を構成する要素や性質に着目し、身の回りにある物の形について、概形をとらえて、およその面積や体積の求め方を筋道立てて考えている。

□既習の面積や体積の学習に基づき概測などを用いて目的に応じて能率よく測定した過程を振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気付き学習したことを今後の生活や学習に活用しようとしたりしている。

３　単元について

本単元では、身の回りにある物の形について、その概形を捉え、およその面積や体積の求め方を考える活動を通して、それらを場面や目的に応じて有効に使い分け、適切に処理できる力を育てる。すなわち、図形の構成要素や性質に着目し、およその面積や体積の求め方を筋道立てて考える力及び考えようとする態度、日常生活に生かそうとする態度などを育てるということである。

これまでに、平面図形や立体図形について、様々なことを学習してきた。図形の面積については、第４学年で長方形、正方形、第５学年で平行四辺形、三角形、台形、ひし形など、第６学年で円の面積の求め方を考え、その面積公式を学習した。また、立体の体積については、第５学年で直方体や立方体、第６学年で角柱や円柱の体積の求め方を考え、その体積の公式を学習した。また、容積は第５学年で扱っている。およその数を求めることについては、第４学年で四捨五入などの方法で概数を求めること、目的に応じて概数を使って計算することを学習している。これらの学習を基に、対象となる物の概形を、基本図形やそれらを組み合わせた複合図形と捉えれば、およその面積や体積を求められることに児童が気付いていくことを大切にしたい。

今回は、単元のまとめの学習として新聞記事を活用する。新聞記事に書かれている情報を基に問題作りを行い、作った問題について友達と話し合ったり、解き合ったりする活動を通して、学習内容の定着を図る。

４　研究主題とのかかわり

（１）問題解決型の学習に迫るために

○単元のまとめとして問題作りをする活動を通して、学習内容の定着を図る。

○発展クラスでは、一人一人が各自新聞から記事を選び、個人で問題作りをする。標準クラスではペア、補充クラスはグループで新聞記事を探して問題作りをする。どのグループも、自分たちで学習に関連する記事や写真を見付ける活動を通して、算数と日常生活が結び付くことに気付き、主体的に問題作りができるようにする。

（２）児童が学び合って解決するために

○周囲の友達と意見交換をする時間を設け、自分が作っている問題が問題として成立しているかを確認したり、友達が作った問題のよさや面白さを見付けたりすることができるようにする。

○自分が作った問題はロイロノートで共有する。互いに作った問題を解き合う活動を通して、学習内容の理解を深めることができるようにする。

（３）NIE との関連

○新聞記事から問題作りをすることで、算数と日常生活のつながりが実感できるようにする。学習を通して、算数で学んだことを生活に生かすことができるようにする。

○見付けた記事は、学習用端末で写真に撮ってロイロノートに保存し、いつでも見返せるようにする。

５　単元の指導計画（５時間扱い）

問題把握：問、解決：解、学び合い：合、まとめ：ま

時	本時の目標（〇） 主な活動内容（・）	◇評価規準（評価方法） □使う資料（NIE）
1 ・ 2	○身の回りにある物の形について、その概形を捉えることで面積を求められることを理解する。 問　解　合 ・東京ドームの概形は、どんな基本図形とみなせるか考える。 ・東京ドームを正方形とみなしておよその面積を求め、実際の面積と比べる。 ・およその面積の求め方をまとめる。 ・練習問題に取り組む。	◇身の回りにある物の形について、その概形を捉えることで、およその面積を求められることを理解し、面積を求めることができる。（観察・ノート） ◇身の回りにある物の形の概形を捉えて、面積を求めようとしている。（観察・ノート）
3	○身の回りにある物の形について、その概形を捉えることで容積や体積を求められることを理解する。 解　合 ・ランドセルを直方体と見て、およその容積を求める。 ・およその容積や体積の求め方をまとめる。 ・練習問題に取り組む。	◇身の回りにある物の形について、その概形を捉えることで、およその容積や体積を求められることを理解し、容積や体積を求めることができる。 （観察・ノート） ◇身の回りにある物の形の概形を捉えて、およその容積や体積の求め方を考えている。 （観察・ノート） ◇身の回りにある物の形の概形を捉えて、容積や体積を求めようとしている。（観察・ノート）
4	○単元の学習の活用を通して事象を数理的にとらえ論理的に考察し、問題を解決する。 合　ま ・地図を使って、都道府県などのおよその面積を求める。	◇学習内容を適切に活用して筋道立てて考え、問題を解決している。（観察・ノート） ◇学習内容を生活に生かそうとしている。（観察・ノート）

5 （本時）	○学習内容の定着を確認するとともに、数学的な見方・考え方を振り返り価値付ける。 合　ま ・新聞記事の中の地図を使って、様々な場所のおよその面積を求める問題作りをする。 ・友達同士で作った問題を解き合う。 ・身の回りの物の形を、どのような基本図形とみなすかを考えたことを振り返り、価値付ける。	□新聞記事 ◇数学的な着眼点と考察の対象を明らかにしながら、単元の学習を整理している。 （観察・ノート） ◇単元の学習を振り返り、価値付けたり、学習に生かそうとしたりしている。（観察・ノート）

６　本時の展開（５／５時間）

（１）本時の目標

□学習内容の定着を確認するとともに、数学的な見方・考え方を振り返り価値付ける。

（２）展開

	○主な学習活動 ・予想される児童の反応	◇指導上の留意点　□主な資料（NIE） ☆評価（評価方法）
問題把握・見通し	○前時の学習を振り返る。 ・地図を使って、都道府県などのおよその面積を求めた。 ○本時の学習活動を確認する。 形の特徴に注目し、およその形から面積を求めよう。	 ◇新聞記事から問題作りをし、友達と解き合うことを伝える。
解決・学び合い	○新聞を読み、問題作りができそうな記事を見付ける。 ・記事を見付けたら、きたコンで写真を撮り、ロイロノートに保存する。 ○記事を決め、問題文を書く。 ・問題が完成したら、自分で作成した問題の答えを求める。 ・記事の写真、問題文、答えの３点をまとめて、ロイロノートで提出する。 ・時間に余裕があれば、２問目や３問目を作成する。 ○友達が作った問題を解く。 ・やってみたい問題を選んで取り組む。 ・いくつかの問題を全体で取り上げてみんなで解き、求め方の違いを検討する。 ・全体で解いた問題は、インターネットで実際の面積を確認する。	□教室にある新聞 ◇発展コースは個人、標準コースはペア、補充コースはグループで活動する。 ◇周囲の友達と意見交換をする時間を設け、作っている問題が、問題として成立しているか確認したり、友達の問題を自分の問題作りの参考にしたりできるようにする。 ☆単元の学習を振り返り、価値付けたり、学習に生かそうとしたりしている。 （観察・ノート） ◇発展コースは、多くの友達の問題を解く時間を確保する。標準・補充コースは、求め方の違いを検討する時間を多くとる。 ☆数学的な着眼点と考察の対象を明らかにしながら、単元の学習を整理している。 （観察・ノート）
まとめ	○学習感想を発表する。	◇算数の学習と、世の中の出来事のつながりが実感できるようにする。

7　協議会記録

（視点１　問題解決型学習）

・児童の問題に向かう姿勢がよく、どのコースも意欲的に取り組んでいた。

・発展コースは、難しい問題にしようという意欲が高かった。

・縮尺から計算し、実際の面積と比べられるのはよかった。

（視点２　学び合い）

・標準コース、補充コースは学び合いの場面が多かった。

・標準コースはペアでの活動なので、電卓はペアの児童の物を使用したほうがよかった。

・補充コースは、グループで活動したことで、友達同士で確認することができていた。

（視点３　NIE）

・縮尺が載っていない新聞が多く、問題作りまでに時間がかかった。

・新聞から「縮尺を探す」ことができていた。

・時期的にイスラエル地域の写真が多く、世界情勢に目を向けることもでき、新聞を使っている意味があった。

（質疑応答）

・問題を作る活動と、友達同士で解き合う活動を２時間に分けるべきか。授業展開を工夫して、１時間で行うべきか。

　→活動が２つ入っているのは、時間的に難しい。２時間に分けたほうがよいのではないか。

・新聞記事は、あらかじめ教員がいくつか選んでおくべきか。今回の授業のように、全て児童が選ぶようにしたほうがよいか。

　→新聞から算数（数学）の要素を探す活動が重要であり、児童が選んだほうがよい。

　→今回の「地図」のように見付けやすいものであれば、教員が選ばなくてよい。

　→日常生活との結び付きを重視するのであれば、児童が自分で新聞から探す活動は必要である。計算ができるようになることを重視するのであれば不要である。

　→補充コースに関しては、新聞を事前に選んでおき、課題に取り組み易くしてもよいかもしれない。

8　指導講評

講師：日本新聞協会 NIE コーディネーター　関口　修司　先生

・既習の事項を、新聞を使って現実に落とし込むことができていた。知識や技能を新聞（実物）に結び付けることができるという気付きが重要である。

・教師が知識、技能を全て伝えきることは難しい。面白かった、分からなかったという気付きを自分で解決する児童もいるはずである。分からなかったら、自分で解決しようという気持ちを芽生えさせることが、これからの教育では重要となってくる。

・問題作りの活動で、縮尺、図形の選択、数値の設定を考える児童が多くいた。求め方が無数にあるため、教師は大変だが、授業として面白いものであった。

・学習指導要領にある「筋道を立てて面積などの求め方を考え、それを日常に生かすこと」を達成できている授業だった。

・コースによって学び合い（対話）の仕方に違いがあってよかった。

・「自分が作った問題」という意識が高い児童が多かった。これこそが問題解決学習である。

・児童は、教師からの評価はもちろん、児童同士の評価を気にする。問題を解き合う活動を通して、自己評価や他者評価が行われ、理解が深まる。

・教科横断的な学びは重要である。今回の活動は、算数と社会をつなぐことができていた。

９　成果と課題

〇成果

・標準コースや補充コースは、ペアやグループでの活動を取り入れることで、図形の様々な概形の捉え方に触れることができた。個人で問題作成をしている発展コースの児童も、きたコンのロイロノートを活用したことで、それぞれが考えたことを共有し、学び合うことができた。

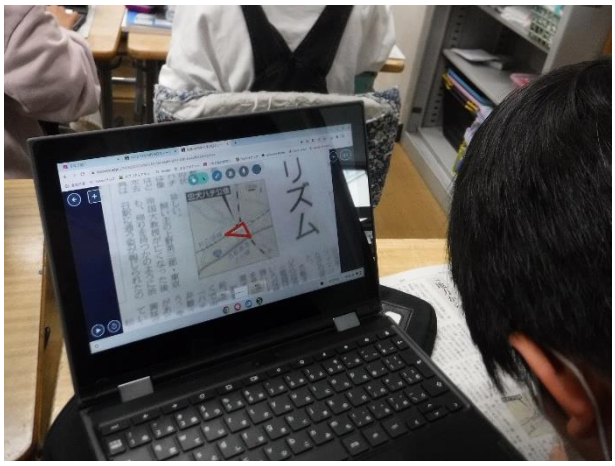
・学習したことの活用場面として、生活に身近な新聞を取り入れたことは効果的だった。

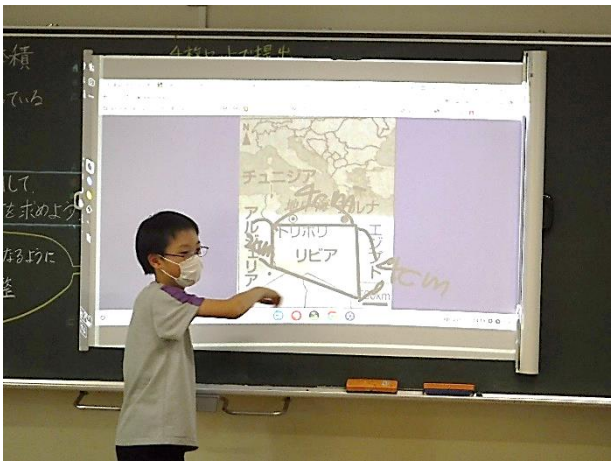
・児童が自分で新聞を選んで問題を作ったことで、一人一人が主体的に活動に取り組むことができた。

△課題

・１時間の中で問題を作成し、解き合う活動を行うことは、時間配分的に難しかった。問題を作る時間と解き合う時間をそれぞれ１時間ずつ設定するとよかった。

・教科書の問題は縮尺が１cm 基準になっていたので計算しやすかったが、新聞記事の縮尺は１cm 基準ではなかったので計算が複雑になってしまった。





【新聞制作学習】　　**特別支援学級　　国語科指導案**

特別支援学級４組　４～６年　１９名

「新聞を作ろう　～先生にインタビューしよう～」

２　単元の目標

□先生にインタビューして、心に残ったことを新聞にまとめる。
□新聞の特徴を見付け、読み手に分かりやすく伝える工夫をする。

３　単元について

国語科の単元「教えて、あなたのこと」（５年）の展開では、インタビューする相手は友達同士で行うが、今回はインタビューする相手を教師にした。そうすることによって、インタビューする相手からの支援を受けることができ、伝えたいことがより分かりやすい形で聞き出せることを期待した。

国語科の単元「新聞を作ろう」（４年上巻）の展開では、新聞作りの基本的なこと知る。どんな新聞を作るかを話し合い、取材をし、割り付けを決めて、記事を書き新聞を仕上げていく。

６年生の児童は、昨年度の国語で、実際に学習グループの先生にインタビューをして新聞を作る学習を行っている。その経験を活かして、初めてこの学習に取り組む４年生と５年生に教えたり伝えたりしながら、役割分担をして、みんなで協力して新聞を仕上げることができることを期待して、本単元を設定した。取材したことから記事を書く児童や、インタビューの際にきたコンを使って写真を撮る児童、取材したことから関連する絵を描く児童など、一人一人の実態とそれぞれのもつ力を活かして新聞を仕上げたいと考えている。

４　研究主題とのかかわり

（１）　問題解決型の学習に迫るために

○単元全体や１時間の授業に見通しをもって取り組めるように、学習の流れやめあてがはっきり分かるような板書や掲示を工夫する。
○実際に相手にインタビューすることを体験させることで学習が深められるようにする。
○児童が学習内容を理解したり、課題を自分で見付けたり、自分たちで取材を進めたりしていけるように、必要に応じて言葉掛けで支援をする。
○NIE たいむと連携を図り、新聞制作における知識や技能を身に付けられるようにする。

（２）児童が学び合って解決するために

○異学年のグループ編成にすることで、互いに教え合う場面を設定し、学びを深められるようにする。
○ホワイトボードや付箋を使って意見を書かせ、組み合わせたり並べ替えをしたりして、意見をまとめられるようにする。
○新聞制作をグループで取り組ませることで、分かりやすく、読みやすい新聞になるように記事の内容や構成、使用する写真などについて意見を交わしながら作成できるようにする。

（３）NIE との関連

○昨年度作った壁新聞を見せることで、活動を思い出せるようにする。
○紙面全体の構成や見出し、写真の工夫などの学習を設定する。

５　単元の指導計画（８時間扱い）

問題把握：問、解決：解、学び合い：合、まとめ：ま

時	本時の目標（○） 主な学習内容（・）	◇評価規準（評価方法） □使う資料（NIE）
1	○新聞から記事の構成や割り付け、見出しの付け方について学習する。 問　合 ・写真や記事から、見出しを付ける。	◇新聞の構成を知ろうとしている。（観察・ワークシート）
2	○昨年度作った壁新聞を紹介して興味関心を高める。 問　合 ・これらどのような新聞を作るかを知る。	◇インタビューしたい内容を考えている。（観察、ワークシート） □壁新聞
3（本時）	○新聞記者になって新聞を作る計画を立てる。 問　合 ・誰にインタビューして、何を記事に書きたいかを決める。	◇インタビューしたい内容を考えている。（観察、ワークシート） □新聞記事

4	○相手に取材をする。 問　解　合 ・相手に話を聞き、メモを取ったり、写真を撮影したりする。	◇インタビューしたことをメモにとろうとしている。（観察、メモ） □新聞記事
5	○新聞の構成や内容、使う写真などを相談する。 解　合　ま ・使う写真を決めて、記事の割り付けをする。	◇新聞の構成を踏まえて、見出しや記事、を作ろうとしている。（観察、新聞記事） □新聞記事
6	○体験したことや取材したことを基に記事を作成する。 解　ま ・分担した内容で記事を書く。	◇意欲的に見出しや記事や写真などを作り、新聞にまとめようとしている。（観察、新聞記事） □新聞記事
7	○記事をグループで発表し、一つの新聞にしていく。 解　合　ま ・一人一人が書いた記事をグループで確認し、集めて新聞にする。	◇相手に知りたいことを意欲的に聞いたり、新聞作りに参加したりしている。（観察、新聞記事） □新聞記事
8	○作成した新聞を発表する。 合　ま ・下学年の児童に、できた新聞で取材した先生の魅力を紹介する。	◇発表の仕方を考えて、相手に伝えようとしている。（発表） □新聞記事

６　本時の指導計画（３／８時間）

（１）本時の目標

□取材する相手の先生に聞きたいことを考えることができる。
□自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりして、協力し合いながら話し合いを進めることができる。

（２）展開

	○主な学習活動 ・予想される児童の反応	**◇指導上の留意点　□主な資料（NIE） ☆評価（評価方法）**
問題把握・見通し	○学習の流れを知り、見通しをもつ。 ○本時のめあてを知る。 ・相手に聞きたいことを考える。	◇学習の流れを提示し、見通しをもたせる。 □新聞記事
	新聞記者になり、取材する相手に聞きたいことを考えよう。	
解決・学び合い	○グループで取材する相手に何を聞きたいか一人一人で考える。 ・聞きたいことを付箋に書き出していく。 ○編集長を中心に一人一人が考えを出し合い何を聞くかを決める。 ・聞きたいことをまとめたり、優先順位を付けたりしていく。	◇各グループに教師がアシスタントとして入り、助言する。 ◇取材する相手に聞きたいことを考えて、付箋に書けるようにする。 ☆昨年度の新聞を参考にして、自分が記事にしたい内容を付箋に書いている。（観察・付箋） ◇書いた付箋を組み合わせたり、並べ替えたりして聞きたいことをまとめられるようにする。 ◇話し合った事柄をワークシートにまとめられるよう支援する。
まとめ	○グループごとにどんな構成の新聞にするか発表する。 ○振り返りをする。次時の確認をする。	

【グループ】

インタビュー対象者(教師)	支援者(教師)	記事を書く児童
A	A	６年生３名、４年生３名
B	B	６年生１名、５年生２名、４年生３名
C	C	６年生２名、５年生２名、４年生３名

7　協議会記録

（視点１　問題解決型学習）

・子供たちがとても楽しそうに意欲的に取り組んでいた。

・インタビューしたいことが「好きな〇〇」に偏りがちだった。他の内容も示すなどの手立てを取って、いろいろなことを尋ねられるとよかった。

（視点２　学び合い）

・インタビュー対象者が支援に入っていたが、児童の実態からヒントなどの支援を直接することができるので、話し合いを進めやすかった。

・分類など「まとめ方やマニュアル」があると児童が自分たちの力でもっと進めることができたのではないか。

（視点３　NIE）

・昨年度同じ単元を経験している児童もいたが、昨年度作った壁新聞を掲示したので、何をインタビューするかを自分で確認することができた。

（質疑応答）

・編集長にどこまで任せるのか。

→編集長経験があったのは、一人だけだったので、見守りながらもすぐに軌道修正できるようにした。子供たちが意欲的に活動するために「誰にインタビューしたいか」というアンケートをとって取材対象者を決めた。インタビューをしたときに、教員が補っていかないと形になるものを作るのは難しいので、子供たちの実態に合わせて、インタビュー対象者と支援者が同じになるようにした。

8　指導講評

講評：立正大学教授　学校評議員　所澤　潤　先生

・特別支援学級でNIEをどのように指導しているかを見ることができてよかった。

・学びのプロセスであるとともに、集約のプロセスを丁寧に扱っていた。通常の学級でも使えることがたくさんあった。

講評：北区教育委員会事務局教育振興部教育指導課指導主事　千田　聡　先生

・久しぶりに特別支援学級の授業を拝見した。開始の挨拶のときに、下を向いていた児童も先生に声掛けをされ、前を向くことができていた。先生方の声掛けがとても柔らかく、優しかった。言い過ぎず、でも必要なことは言うことが本当に上手にできていた。

・みんなで協力して新聞を作る。それぞれの実態とそれぞれもつ力を生かして新聞を作る。通常の学級でも大事なところなので、多くの学級で実践してほしい。

講評：日本新聞協会NIEコーディネーター　関口　修司　先生

・編集長の仕事は一回でできるようにするのではなく、役割をもたせてあげることがまず大事である。そして、具体的にやることができるようになったら褒めてあげる。立場で育ててあげることが、初等教育では大切である。少しずつできるようになっていけばよい。

・分類について、今日は、混沌とした状況だった。本時では、正しく分類できなくても、分類の仕方の方向性が見えたのであればいいのではないか。それを積み重ねていく、繰り返していく中で、法則性を見付けていけれ

ばよいと思う。特に特別支援学級の場合、子供たちの学びがゆっくりなので、おおらかに見てあげる必要がある。
・分類整理の軌道修正は、授業のねらいを意識した上であれば、よいと考える。
・取材したことを伝える上では、自分が知りたいことと、伝えたいことは分けた方がよい。
・新聞作りは仲間作りでもある。役割分担をしながら関わり合い、活動を進めていけるとよい。
・役割分担をしても、全員に必ず文章を書かせていくことで、教育効果が上がる。イラストが得意でも、それだけではあまり意味がない。
・本時の授業は、友達の付箋を見たり、話し合いを聞いたりしながら思考し、興味の範囲が広がったり、知りたかったことが具体的になってきたりしていた。一生懸命考え、思考を広げていた。考えを深めていた児童もいた。ただ、付箋に書いて貼っていただけではないので、そこを見取って褒めてあげてほしい。
・本時の授業では、自分の付箋に書いたことではなく、友達の質問を採用していた児童もいた。
・インタビューは、時間軸をずらしたり、空間をずらしたりしていくと、レベルアップしていける。
・児童は書くことに苦手意識をもたなくなってきている。普通に発言できる児童も育ってきている。人間関係も良好に育ってきているのではないかと感じた。

9　成果と課題

〇成果
・先生にインタビューして新聞を作る活動は、児童にとって分かりやすく有効だった。
・記事の内容をグループで話し合う活動は、児童相互が適切に関わり合うことができ、学び合うことができた。
△課題
・付箋の使い方や分類の仕方は、他の教科や単元でもできるので、活用できるようにしていきたい。

【聞きたいことを付箋に書き分類する】
（個人から班）

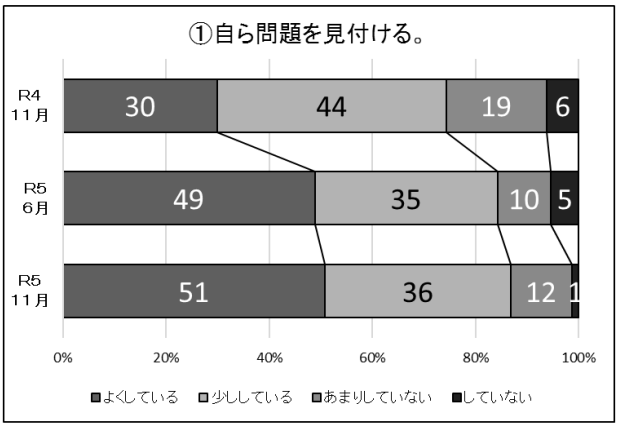
【新聞の構成を発表し合う】
（全体）

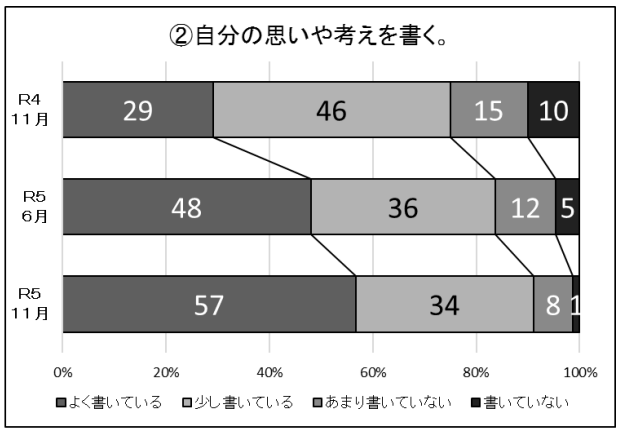
Ⅳ　全体のまとめ

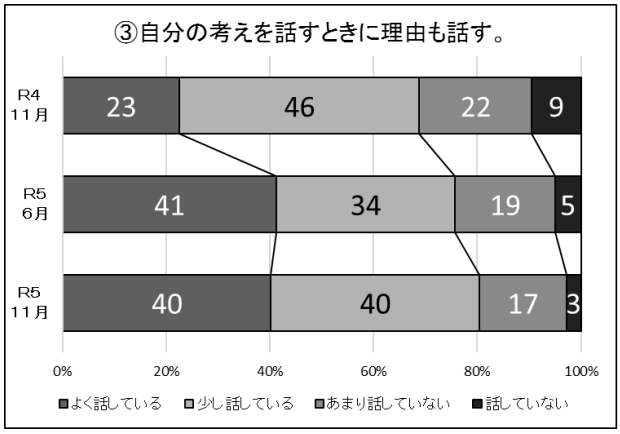
１　実態調査の分析

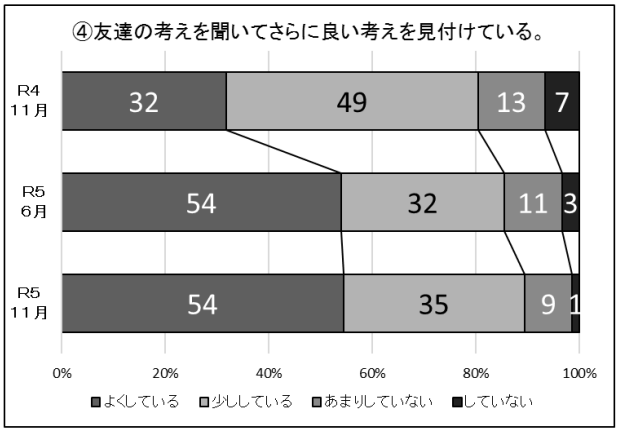
今年度は、研究授業を行う前の６月と全学年の研究授業を終えた後の１１月の２回、全校一斉にアンケート調査を実施した。それぞれの結果を比較し、児童の変容について検証した。

（１）問題解決型学習に関わる意識の変容







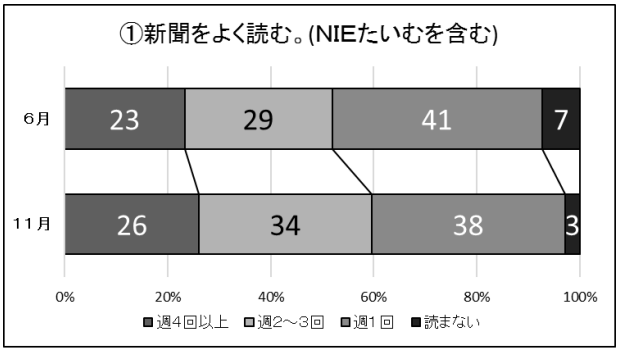


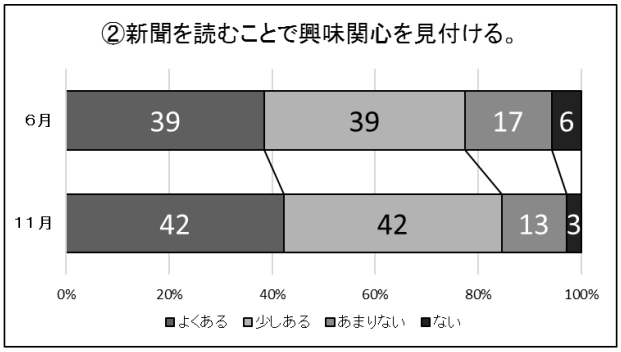
どの質問項目においても、１１月には肯定的な回答が３～７ポイント増加し、全校の８０％を超えている。中でも、②「自分の考えをノートに書く」については、９０％を超えている。これは、昨年度と比較すると１６ポイント増加している。

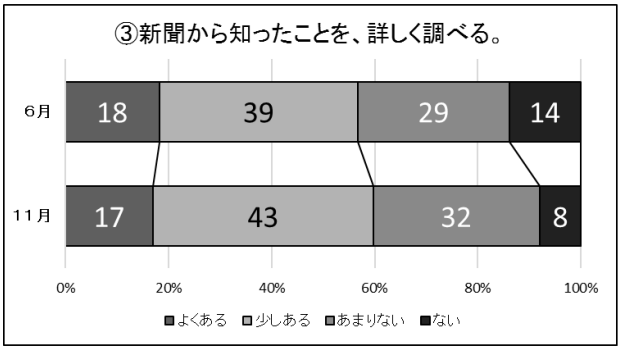
また、③「自分の考えを話すときに理由も話す」は、昨年度全校で７０％に達していなかったため、課題として挙げられていたが、昨年度と比較して１１ポイント増加している。

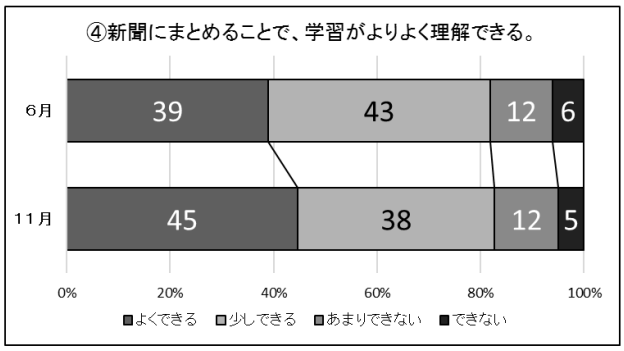
全校で継続して問題解決型の学習を行ってきたことで、児童の学習に対する意識も高まってきたと考えられる。

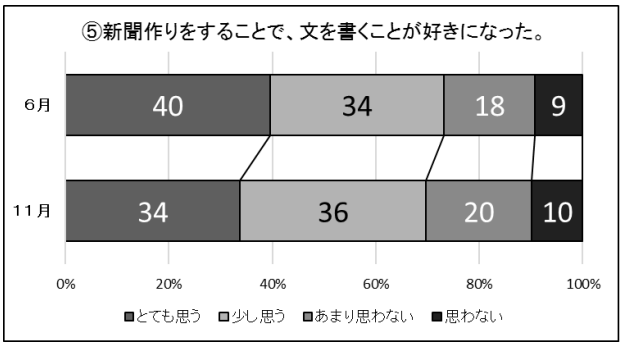
（２）NIE に関わる意識の変容

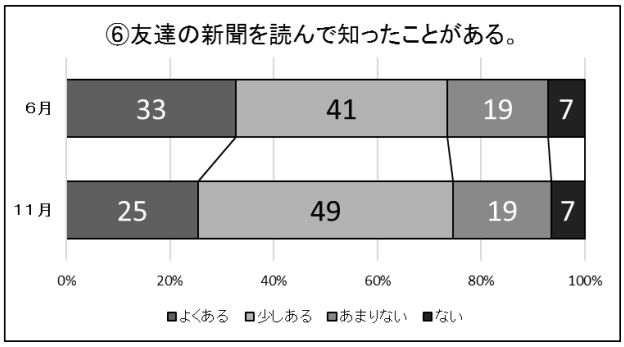












①の結果をみると、日常的に新聞を読んでいる児童が増加したことが分かる。６月と比べ、１１月には肯定的な回答が８ポイント増加し、全校の６０％の児童が週に２回以上は新聞を読むようになった。

②より、新聞から興味・関心のある記事を見付けることが「よくある」「少しある」と答えた児童が、１１月には６ポイント増加し、全校の８０％を超えた。また、③より、新聞を読んで知ったことを、自主的にさらに調べたことのある児童が３ポイント増加し、全校の６０％まで達した。新聞を活用した授業を行ったことで、新聞に対する興味・関心が高まったと考えられる。

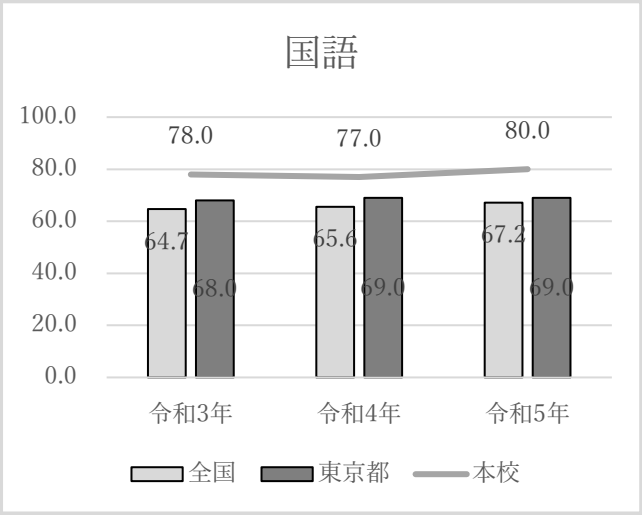
新聞制作については、④より、学習したことをよりよく理解することが「よくできる」「少しできる」と答えた児童が、６月も１１月も全校の８０％を超えている。また、⑥より、友達が制作した新聞を読んで興味・関心をもった児童は、６月も１１月も７０％に達している。一方、⑤より、新聞制作を通して文を書くことが好きになった児童は、全校の７０％に達しているが、６月と比べて１１月には４ポイント減少している。

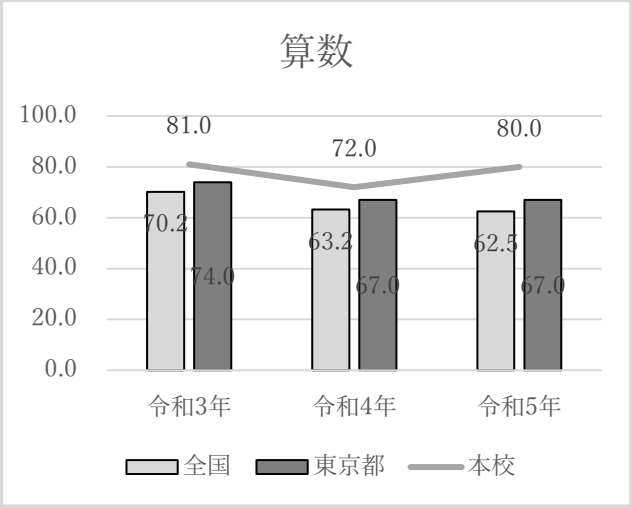
発達段階に合わせ、どの学年でも新聞制作活動を行っているため、多くの児童が、新聞にまとめたり、友達の書いた新聞を読んだりすることが学習に効果的であると実感しているようである。しかし、書くことが好きではない児童が３０％近くいるため、文を書くことへの抵抗感を減らし、楽しく新聞制作ができるような手立てを考えていく必要がある。

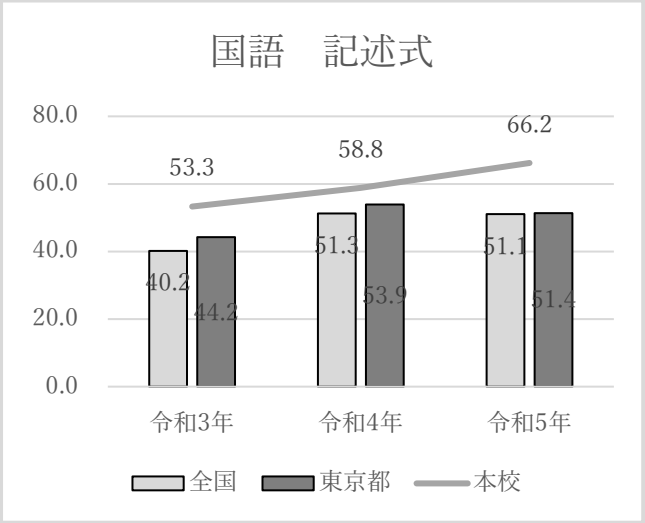
２　学力調査の分析

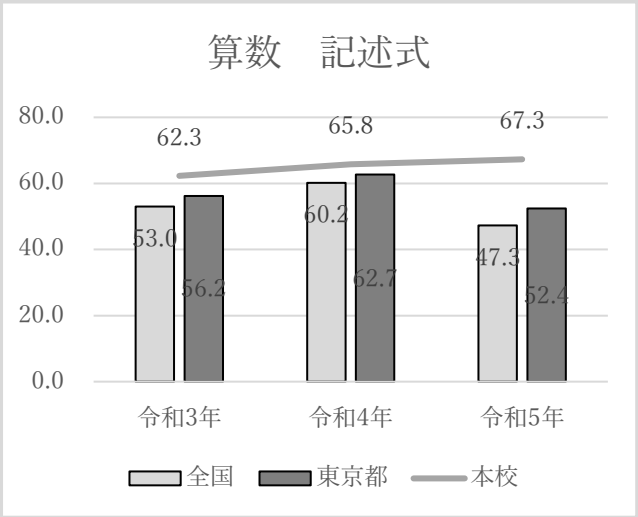
全国学力・学習状況調査と、北区基礎・基本の定着度調査の結果から、本校の研究の成果を検証した。

① 全国学力・学習状況調査結果（６年生）（令和３年～５年）の分析









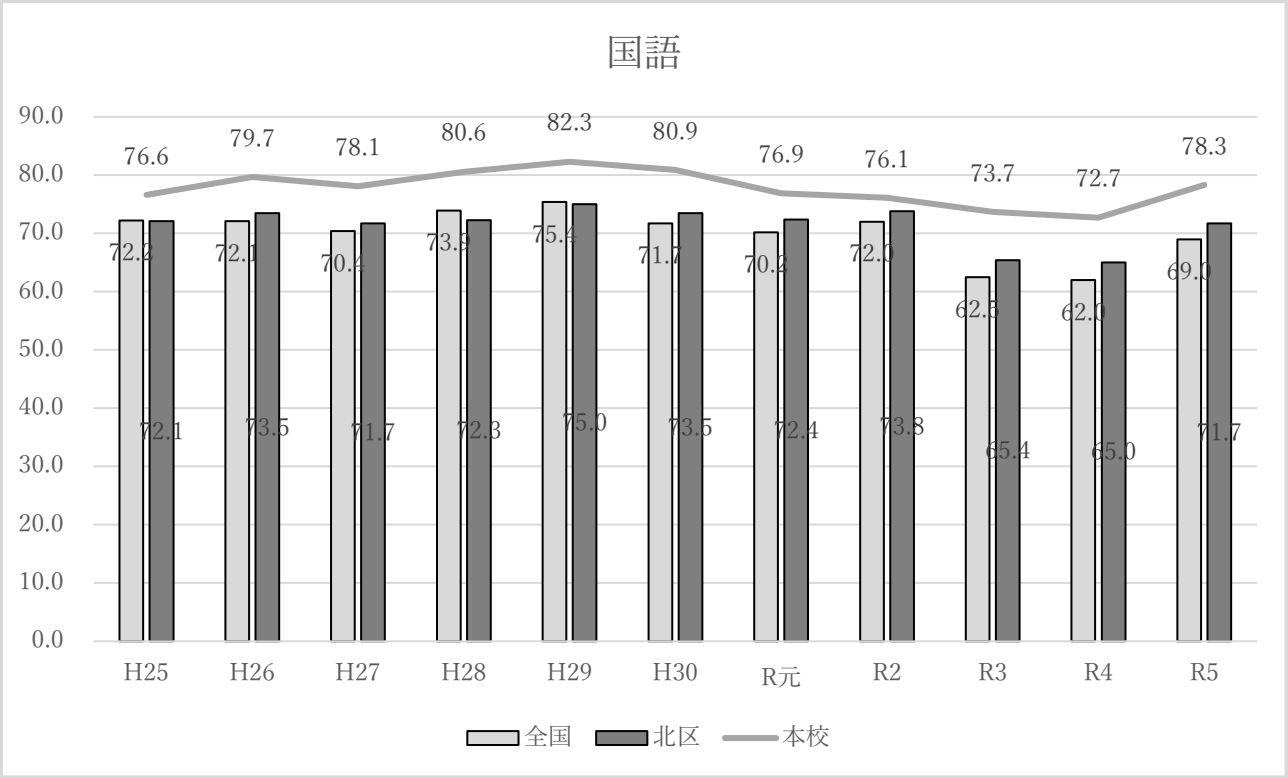
過去３年間の国語と算数の調査結果である。国語全体の平均正答率は、全国と比べて、令和３年は 13.3 ポイント、令和４年は 11.4 ポイント、令和５年は 12.8 ポイント上回っている。全国との差に変動はあるものの、いずれの年も 10 ポイント以上上回っている。

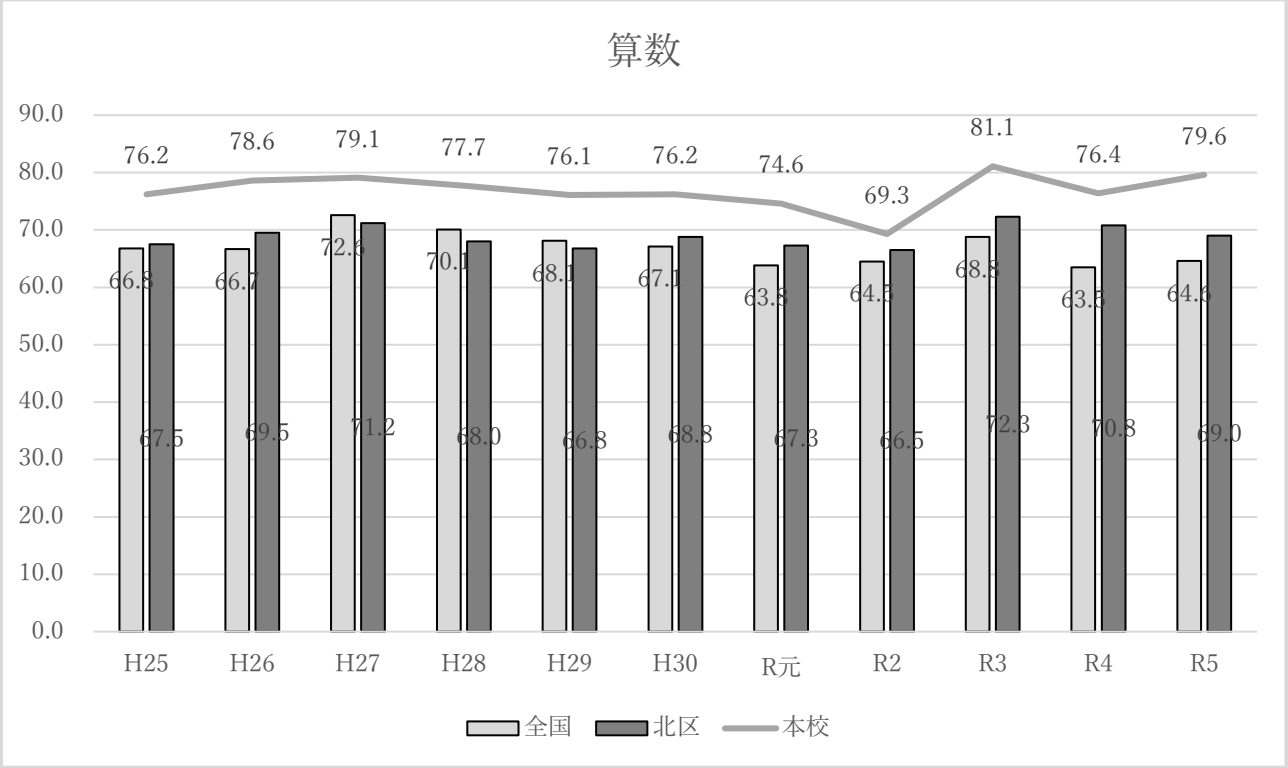
算数全体の平均正答率は、全国と比べて、令和３年は 10.8 ポイント、令和４年は 8.8 ポイント、令和５年は 17.5 ポイント上回っており、こちらも年によって差はあるものの、大きく上回っている。

また、記述式問題の正答率に、顕著な結果が見られる。この３年間、国語、算数とも年々記述式問題の正答率に伸びが見られる。令和３年、４年は、国語、算数とも、全国を上回っているが、令和５年は、全国、東京とも記述式の正答率の伸びが見られない中、本校では、全国と比べて国語は 15.1 ポイント、算数は 20 ポイントと大きく上回っている。

本校の児童は、問題を読み解く力、自分の考えを文章で表現する力が着実に身に付いていると分析できる。

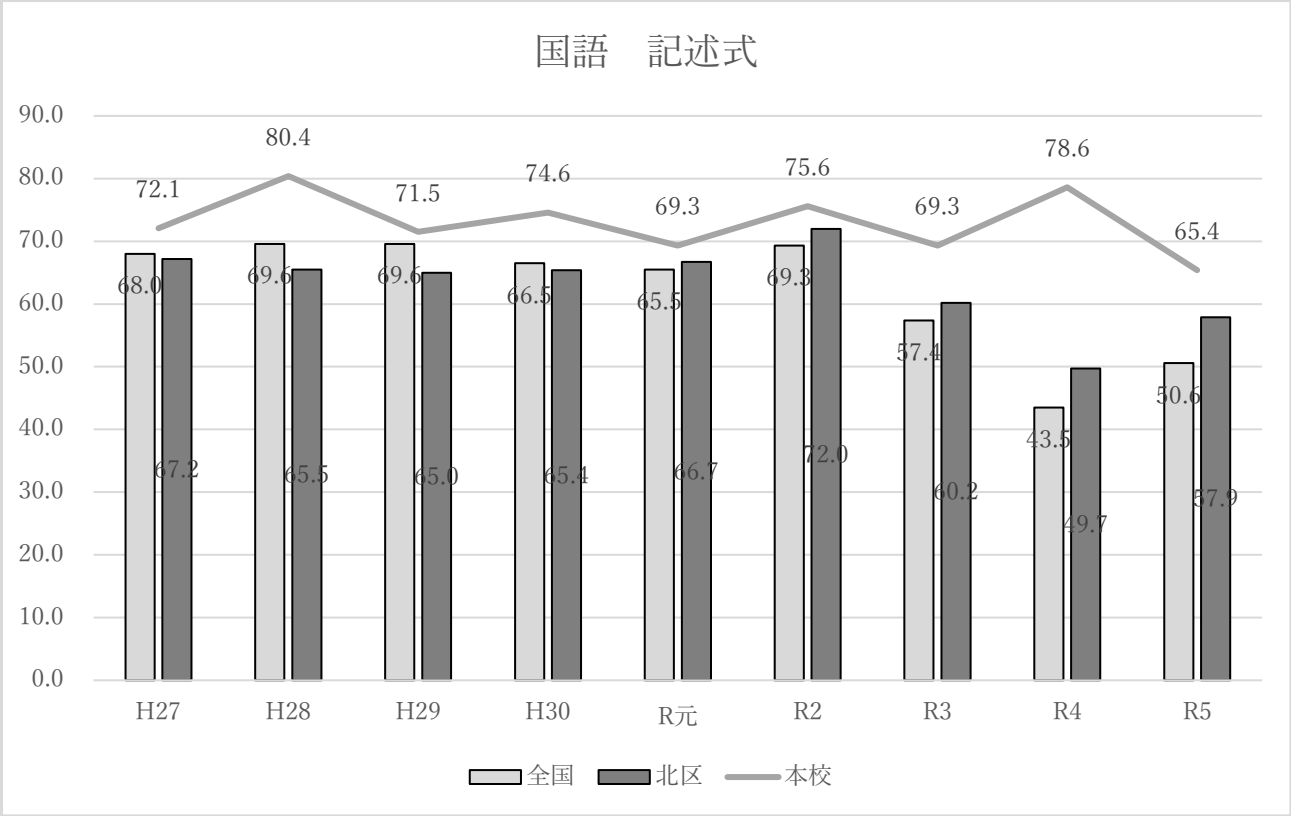
②北区基礎・基本の定着度調査結果（６年生）

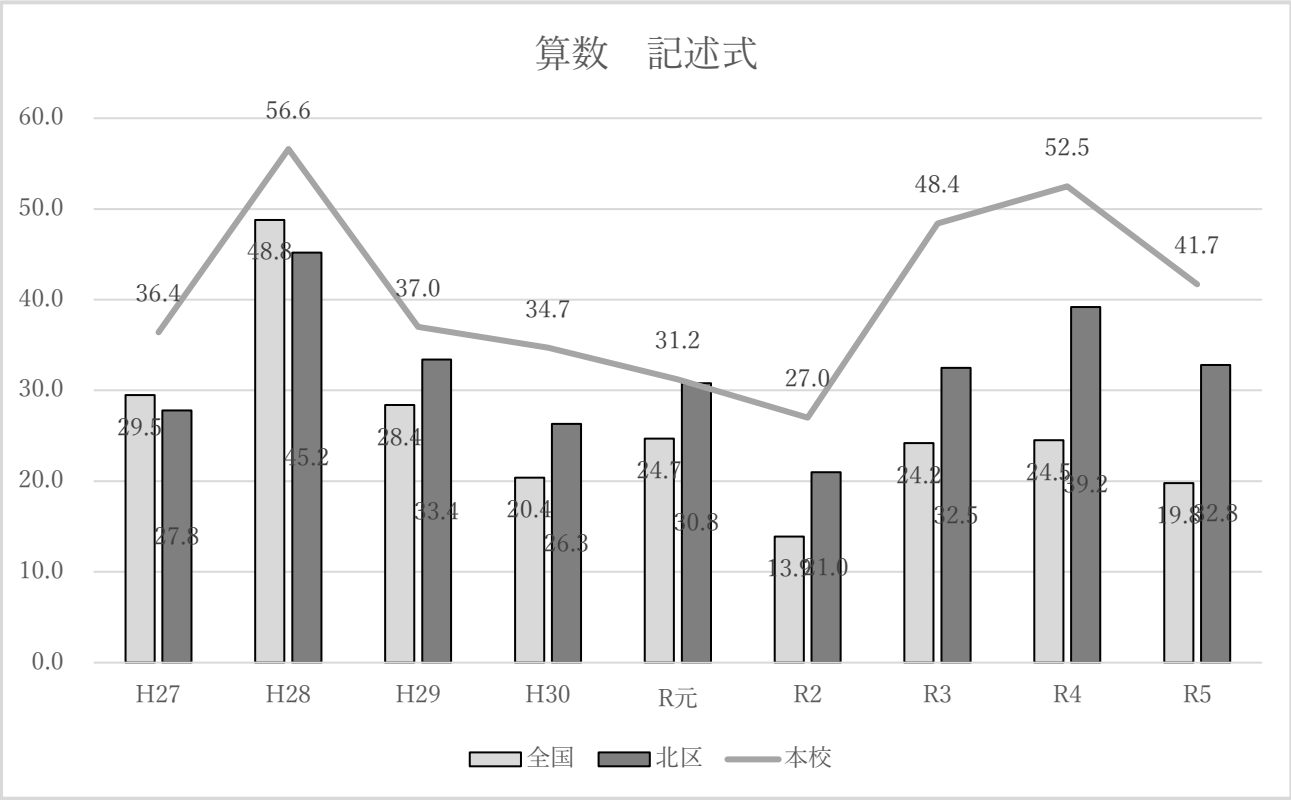




本校の NIE は、平成２５年から開始された。この 10 年間、国語、算数とも、全国の平均正答率を上回っているが、その差は大きくなっている。平成 25 年は、国語は 4.4 ポイント、算数は 8.4 ポイントの開きであったが、令和５年は、国語は 9.3 ポイント、算数は 15 ポイントの差となっている。10 年間の NIE の継続が、着実な力となっていると考える。

あわせて、北区の国語、算数の平均正答率も、全国と比較して上昇していることを付け加える。





記述式問題においても顕著な伸びが見られる。北区基礎・基本の定着度調査において記述式問題の正答率が明らかになった平成 27 年以降、全国との差を見ると、平成 27 年は国語が 4.1 ポイント、算数が 6.9 ポイントだったのに対し、令和５年は、国語が 14.8 ポイント、算数が 21.9 ポイントと大きく上回っている。

あわせて、北区の記述式問題における平均正答率も、伸びていることを付け加える。

３　研究の成果と課題

（１）問題解決型の学習

前時と本時の学習を比較して違いを見付けたり、本時のめあてや問いを意識して、１単位時間の学習に取り組んだりすることにより、児童自身も自ら課題を見付ける意識を高めることができた。また、週に１回のＮＩＥたいむで、新聞から内容を読み取って、自分の考えを書く活動が習慣となっているため、学習においても抵抗なく自分の考えをノートやワークシートに書くことができている。

しかし、問題を解決した後に、さらに問題を見いだしたり、自ら調べたりする児童が少ない。問題解決に取り組む意欲はあるが、問題に正対していなかったり、考えが浅かったりする児童もいる。そのため、年度当初に教員間で「問題解決の過程」（p.4）を共通認識する機会を設定し、同時に児童が学習過程を意識して取り組むことができるようにする。そして、発問内容の焦点化をし、課題を明確にしていくことで、児童が考えを深めていけるようにする必要がある。

（２）児童の学び合い

どの学年でも、学び合いによって、自分では思いつかなった考え方を学んだり、自分と友達の考えの共通点や似ているところを見付けたりした。そのことで、全体での交流の際に、自信をもって発表することができる児童が増えた。主体的な学びにもつながっている。低学年では、ペアを基本とした学び合いに取り組んだ。全体で共有した友達の考えをノートに書き、それを参考に自力解決を進めた。中・高学年は、きたコンを使った学び合いの活動を取り入れることで、直接意見が聞けなかった児童の考えを知ることができた。直接対話することを大切にしながら、ＩＣＴ機器を効果的に使っていくことで、より主体的な学びにもつながる。

一方で、根拠をもって発言することができていない児童もまだ見られる。そのため、日常の体験を思い起こさせたり、既習事項の活用や学習内容を振り返ったりするような環境を整える必要がある。

（３）ＮＩＥの活用

ＮＩＥたいむを中心に、様々な教科で新聞を用いたことで、教科の学習が社会につながっていることが実感できている児童が増えた。また、年度始めは新聞記事を読んで、見出しを考えるなどの児童が楽しめる活動を取り入れることにより、新聞に対して前向きな気持ちをもたせることができた。

低学年でも、新聞を読む児童が増えている。入学当初は、新聞紙を素材として扱い、遊びを通して、新聞のめくり方や片付け方を覚えた。そこから徐々に、お気に入りの写真を探したり、文字を探したりすることで少しずつ新聞記事にも目を向けるようになった。また、記事の見出しを朝の会で紹介することで、だんだんと記事にも興味関心を示す児童も増えてきた。

中学年になると、４週間を１サイクルと考え、第１週で新聞記事を選び、スクラップを作った。第２週では、選んだ記事の要約をしたり自分の考えを書いたりする活動をした。第３週では、先生が選んだ新聞を読んで感想を書き、第４週で前の週までに作成したスクラップの中から学習用パソコンで実際に調べる活動を行った。要約の経験を積み重ねていくことで、国語科の要約の学習では抵抗なく取り組むことができた。

高学年でも、同様に４週間で１サイクルとし、第１週、第２週の活動を継続していった。ただ、新聞から情報を得ただけで終わることが多かったので、第３週は、選んだ記事の内容について調べる活動を取り入れ、さらに第４週では友達と共有する活動を行うことで、問題解決型の学習へとつなげながら、自ら課題を見付ける児童を目指したい。

全学年を通して、発達段階に応じた計画を立て、児童にとって無理のない範囲で新聞に親しむことができた。学習で新聞を扱うことに抵抗なく取り組むことができている。また、学習のまとめで新聞を作成することに関しても、問題なく取り組むことができている。その反面、新聞作りに苦手意識をもっている児童がいたり、読み・書きの個人差が見られたりした。そのため、発達段階に応じて、より細やかな活動を検討していく必要がある。

お　わ　り　に

本校では、平成２５年度から『NIE《Newspaper in Education》』、新聞を学習活動に取り入れた活動を実践しております。この間、児童の問題解決能力の育成に向けて、教職員は様々な取り組みをしてまいりました。

わたくしは、本校の「NIE」の研究開始時から平成２８年度までの３年間を、担任として携わらせていただいておりました。そして、昨年度、ご縁があり副校長として着任いたしましたところ、学校の隅々に「NIE」が浸透していました。校長室の前には、新聞各紙が積み上げられ、朝、校長室に健康観察板を届けに来た日直の児童が今日の新聞を眺めて選び、教室に持って行きます。以前は６年生だけが発行していた学級ごとの「学級新聞」は、４・５年生にも広がっていました。「滝小版 NIE」は、確実に進化していることに驚きました。各種の調査結果で如実に表れていますように、地道に活動を継続してきたことで、児童の知識や技能を深め、思考力、判断力、表現力の向上、そして、学びに向かう力や人間性等の涵養につながっているのだと確信しております。

本年度は、今までの研究成果の発表を行う年となりましたが、教職員はマンネリ化せず、常に新たな取り組みにチャレンジしてまいりました。本日の発表会におきましても、これまでの様々な実践を提案・発表していけたらと思っております。

最後になりましたが、２年間を通じ講師をお務めいただいた日本新聞協会 NIE コーディネーター、本校第１８代校長関口 修司先生はじめ、北区教育委員会の先生方、関係団体の皆様に心より感謝し、厚く御礼申し上げます。